松山市文化財報告書II

天山・櫻谷遺跡発掘報告書

松山市教育委員会

松山市文化財協会

序

緑の石鎚連峰と風光明美な瀬戸内海に囲まれた松山は、古代より人が住み栄えたところで埋蔵文化財の宝庫でもあります。この美しい自然の恵みに満ちた静かな城下町松山市も、ここ数ヶ年の宅地開発、道路工事等によりこの重要な埋蔵文化財の保存は重大な危機にさらされているのではないかと憂慮しているものであります。開発か、保存か、ここに文化財保護行政のむつかしさがありますが、祖先の生活のあとをうかがえる貴重な文化財の保存には今後とも万全を期したい所存であります。

本書は天山、桜谷遺跡の緊急発掘調査の報告書であります。

天山は、伊予風土記に「伊与ノ郡、郡家より東北にむかい、天山在り、天山と名づくる由、倭に天ノ加貝山在り、天より天降したまう時に、二つに分きて、片端をば倭の国に天降し、片端をば比の土に天降しき。因りて、天山というはこのことの本なり。其の御影を敬いて、久米寺につかえまつりき。」とあり、伊予と大和との関係が物語られております。付近には最近発掘調査した四国有数の「釜ノ口遺跡」のほかにも弥生住居跡、木製品などが多数出土した遺跡群があります。また、桜谷古墳は聖徳太子がわが国最古の温泉碑を建てられたという伊佐爾波の岡北方数百mのところにあり、付近一帯には、古墳や石棺が多数ありましたが、数年前農業改善事業で消滅してしまったといわれております。その記録は少なく、この調査報告書でそのへんりんが判明する程度ですが貴重な記録であります。天山神社北遺跡、桜谷古墳ともに作業中発見されたものであり、記録ができただけでも幸としなければならない状況でありました。

古照遺跡、釜ノ口遺跡が発見されてからは、埋蔵文化財について一般市民の認識は大変高まりつゝありますが、まだまだ充分とはいえないのが現状であります。「考古学は、古代史を究明する唯一の科学である。」我々祖先の営々と築いた文化、松山の歴史を知るためにも市民各位の積極的協力をお願いする次第であります。

本調査、ならびに報告書作成に当った長井数秋、森光晴両文化財専門委員と大山正風氏に対して厚くお礼申しあげるとともに謝意を表し、本書がひろく活用されることを期待いたします。

昭和48年3月30日

松山市教育委員会
教育長 関谷勝良

伊予天山遺跡発掘調査報告書

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　調査に至る経過……1
Ⅲ　遺跡の位置および環境……2
(1)　遺跡の位置……2
(2)　遺跡の環境……2
Ⅳ　天山北遺跡……4
(1)　遺　構……4
(2)　出土遺物……4
(3)　出土遺物についての若干の考案……9
Ⅴ　天山第１号古墳……11
(1)　墳　丘……11
(2)　内部構造……11
(3)　石室内部の遺物の出土状況……13
(4)　出土遺物……15
(5)　若干の考察……17

伊予天山遺跡発掘調査報告書

長井数秋・森　光晴・岸　郁男・矢野　完・西尾幸則

Ⅰ　はじめに

伊予天山遺跡は昭和46年の12月末に山林を開墾中偶然発見されたものである。遺跡発見の発端は、開墾中にたまたま古墳が発見されたことにある。そのうえ古墳のすぐ北側に時代の全く異なる弥生時代の遺跡が存在していたことも判明した。しかし、開墾作業のため遺物の出土状態や遺構等は全く確認することができず、作業中に出土した遺物によってそれを伺うことができたに過ぎなかった。

発見され、発掘した古墳も、その痕跡がわずかに伺がえるのみという段階にまで破壊されていた。それゆえ、発掘調査報告書とは名ばかりであり、実質的には出土遺物についての説明に終る結果になると思う。しかし、若干ではあるが、愛媛県下の弥生時代ならびに古墳時代の様相を明らかにする遺物も出土している。これらについては部分的にではあるが考察も加えてみたいと思っている。

なお報告は弥生遺跡と古墳に章を別けて説明したい。

Ⅱ　調査に至る経過

弥生遺跡を天山北遺跡、古墳を天山第１号古墳と称し、これによって以後説明してゆきたい。天山北遺跡ならびに天山第１号古墳は、松山平野中央部に存在する分離独立丘陵である天山（52ｍ）の北部山頂に立地している。その北部山頂の山林を土地所有者である渡部繁一氏が、昭和46年１月から開墾しはじめた。開墾は単に山林を切り開くだけでなく、山頂部を削り取り周辺にその土砂を客土して平担な農耕地を得ることを目的としていた。

その作業行程の一環として、頂上部に鎮座する祠を約２ｍ西方に移動させ、その跡を削り取っていた段階で発見したものである。この山頂部の北麓は以前にすでに土砂採取のために大きく削り取られ、垂直の崖となっている。

渡部氏は開墾中に発見した土器類を、戦国時代の星ヶ岡古戦場に係るものではないだろうかと考えて、開墾を続行したとのことである。同氏は昭和46年12月６日に鉄剣が出土するにおよんで、ことの重要性に気づき同日ただちに松山市教育委員会に通報した。

この通報に接した市教育委員会はすぐさま森光晴氏と筆者２人に現地調査をすべく依頼してきた。われわれの現地調査の結果、弥生時代の遺跡と古墳が隣り合せに存在する遺跡であることが判明した。そこで開墾作業の中止を依頼し、緊急に発掘調査を実施する必要性を市教育委員会に報告した。

その結果、市教育委員会はただちに緊急調査の実施に踏み切った。われわれが調査に着手した段階においては、弥生遺跡はすでに消滅しており、ただその南部に存在する古墳の床面の一部が遺存しているに過ぎない状態であった。そのため発掘といっても古墳の床面の２/３を、それもわずか３cm発掘したに過ぎない。古墳の羨道部は消滅し、石室の石もことごとく取り除かれ、石垣に使用されていた。発掘の結果は玄室床面の平面プランがかろうじて推定できるだけであった。

なお天山遺跡の調査は松山市教育委員会がこれにあたり、発掘そのものは、森光晴、岸郁男、矢野　完、西尾幸則、長井数秋の５名が担当した。

調査期間は昭和46年12月７日より８日までの２日間であった。

III　遺跡の位置および環境

〔1〕　遺跡の位置

天山遺跡の絶対位置は東径123°47′03″、北緯33°49′06″の交差する周辺地域である。

行政的位置は愛媛県松山市天山町294番地で、地目は山林となっているが、現状は普通畑である。

〔2〕　遺跡の環境

〔自然環境〕　高縄半島に水源を発する石手川はほゞ北東方向から西南方向に流出し、松山平野の西部で重信川に合流している。高縄半島西部に広がる県下最大の肥沃な松山平野は、この両河川によって形成されたものである。

石手川の南部の1.5km隔てた付近を東西に流れる小野川は下流で石手川に合流する。この小野川の中流付近の沖積平野には和泉砂岩よりなる天山（52m）、東山（53m）、星岡山（75m）、土亀山（53m）の分離独立丘陵が連続して存在している。

この分離独立丘陵の一つである天山は北西～南西に走行する脊梁を有する長さ約 600m の丘陵である。この丘陵の北端に近い山頂部に当遺跡は立地している。天山を中心とする各分離独立丘陵の周辺は、前述した小野川と、これに合流する川附川が複雑に蛇行しながら低湿地帯を形成している。この低湿地帯に続く北部は、東野町から延びるゆるやかな洪積台地に続いている。

天山を中心とした丘陵は松山平野の中央部にあり、山頂からは松山平野のみならず瀬戸内海や石鎚山を中心とする四国山脈や高縄半島を望むことのできる眺望豊かな場所である。

〔社会環境〕　重信川、石手川によって形成された松山平野の山麓周辺には縄文時代から弥生、古墳時代にかけての遺跡が夥しく発見されている。特に弥生遺跡はその数が多く、300ヶ所以上あり、更に次々と発見が続いている現状である。松山平野を眼下に望む地域には、行道山、田ノ浦、大峰台等10余[註1]の高地性遺跡が分布している。

弥生中期の遺跡が山麓に近い松山市の道後祝谷町一帯に分布するのに対し、弥生後期の遺跡の中心は低湿地ないしは低湿地を前面にひかえた台地端に立地が変遷している。特に古照遺跡[註2]もそうであるし、天山北部の低湿地中には石井北遺跡[註3]がある。更に低湿地を前面にのぞむ台地端の微高地には小坂釜ノ口遺跡[註4]や松末遺跡[註5]等が広範囲にわたって立地している。

天山周辺のこれら遺跡は前期末から中期、更に後期の遺物、遺構を出土しているが、その中心は後期に属するものである。

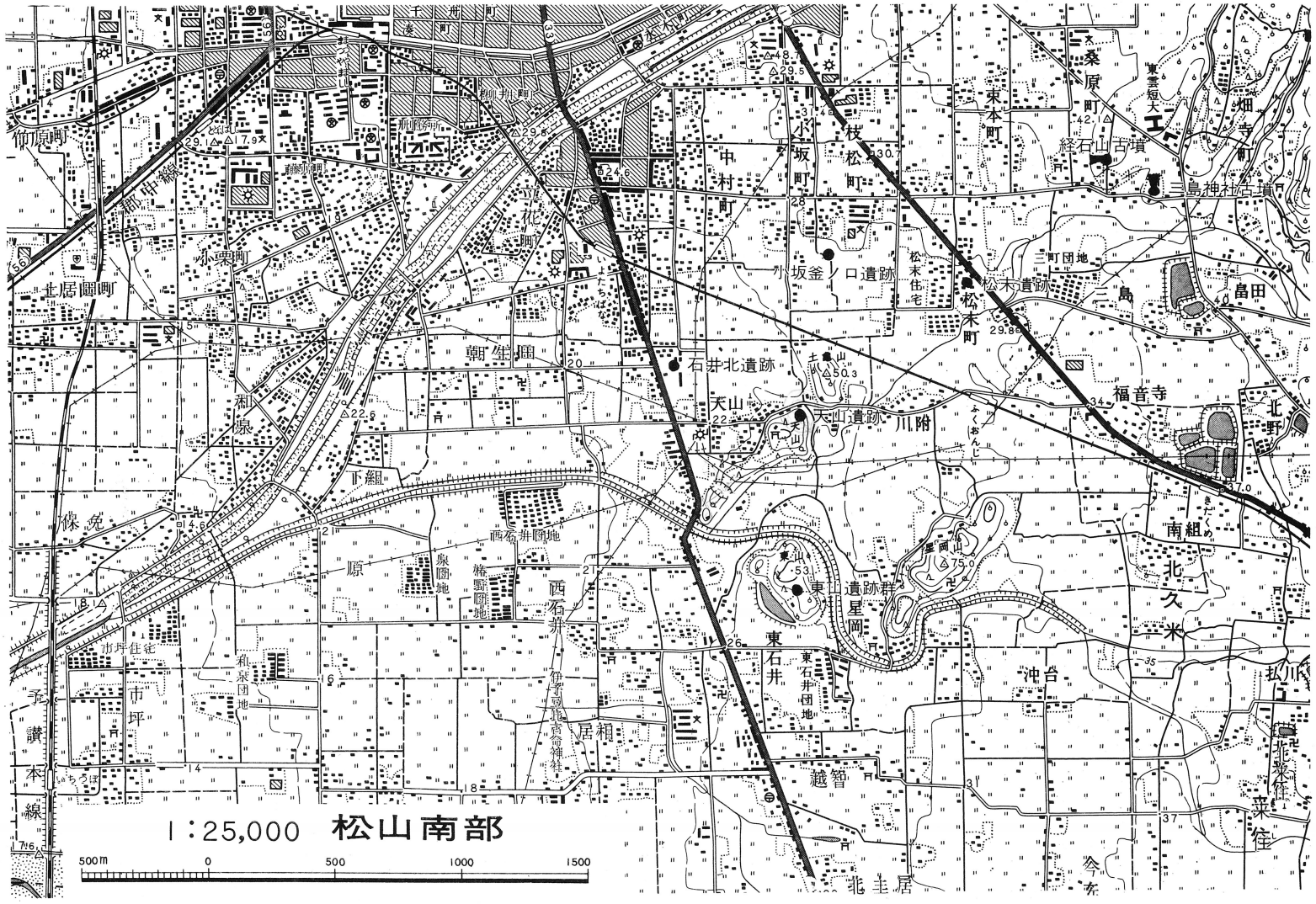
当遺跡の立地する天山には、南北に走る脊梁に沿って、5ヶ所の弥生遺跡と、古墳が6基分布している。天山の北に続く土亀山の山頂にも弥生式土器を出土する遺跡があり、南に並ぶ東山の丘陵上には縄文、弥生遺跡と共に10余基の古墳が分布している。更に東方に並ぶ星岡山にも東山と同様な遺跡がその数を増して分布している。石手川を隔てて存在する城山[註6]や冠山[註7]、道後公園山[註8]の山頂部にも弥生遺跡があり、城山には古墳も数基分布している。

このようにみると、天山のような松山平野中に存在する分離独立丘陵上には必らず縄文や弥生、更に古墳時代にかけての遺跡が分布するという共通性を持っている。

古墳の分布は若干前述したが、今少し触れてみよう。天山の北方の1.6kmのお茶屋台に続く洪積台地上には前方後円墳である経石山古墳や三島神社古墳[註9]が存在し、その東の山麓から久米・平井・重信町、川内町の一帯にかけて夥しい古墳群が知られている。他方重信川を隔てた四国山脈の山麓部にも、久谷から砥部町、伊予市にかけて無数の古墳群が続いて分布している。

このように、広大かつ肥沃な松山平野の周辺部には古くから文化が開花しており、最近では、沖積平野面上でもそのことが伺える遺跡が次々に発見されつつある。

Map 1　天山遺跡周辺の地形図



Ⅳ　天山北遺跡

〔1〕　遺　構

天山第１号古墳の石室奥壁の北隅よりほゞ北へ約４ｍの地域に弥生時代の遺構とみられるものが存在していた。すでに前述したごとく、われわれが現地調査をした段階で遺構そのものは完全に消滅していた。それゆえ、遺物の出土状況ならびに遺構等は不明である。ここではとりあえず実際に土器を開墾中に発掘した渡部繁一氏の体験を中心にし、われわれの確認した点をこれにつけ加えて触れてみたい。

弥生の遺物は、遺跡発見の発端となった古墳の石室床面よりも約30cm低いレベル面から出土している。遺物は和泉砂岩の風化した地山直上にあり、遺物包含層は黒灰色の灰層から形成されていた。ただこの遺物包含層は、全面にわたって存在していたのではなく、径約２ｍ程度の円形状のピット中から一括して出土している。天山第１号古墳の床面は和泉砂岩の風化した地山であることから、古墳築造の際に削ずって平担面を造成したとしても、ピット状の遺構は上部が一部破壊されたのみで残存したものと考えられる。

このピット状の中から発見された弥生の遺物はすべて弥生式土器のみであり、石器類や他の遺物は全く検出されていない。われわれの調査によっても弥生式土器片を周辺から若干採集したのみであり、客土された土砂の中からも弥生式土器片がみられただけである。これらのことから推定する限りにおいては、天山北遺跡の遺構は単に円形状のピット中に弥生式土器が一括して埋蔵されていたといえるものではなかろうか。

というのは、このような例は岡山県の芋岡山遺跡[(註10)]でもみられ、松山市内でも時期的には当遺跡よりも若干先行する中期の東雲神社遺跡[(註11)]においても同様な遺構が検出されているからである。たゞ東雲神社遺跡と若干相違する点は、出土する弥生式土器の持つ特色である。東雲神社遺跡も弥生式土器のみを出土することは同様であるが、土器は壺形、甕形、鉢形土器とも下腹部に共通して意識的に円孔が穿たれた形態を持つのに対して、当遺跡においてはそれが認められず、かわって壺形、甕形土器はあるにはあるがその主体が台付壺形土器や高杯、器台形土器という献供品的意味を有する点であろう。いずれにせよそこには何か共通するものが存在しているように考えられるがこれについては後述したい。

〔2〕　出土遺物

直径２ｍのピット状遺構とみられるものから出土した土器は、すべて採集したとは限らないが、その殆んどは部分的にしても集め得たものと考えられる。それによると19個±３個はあったとみられる。唯一点のみ周辺から出土したものがある。

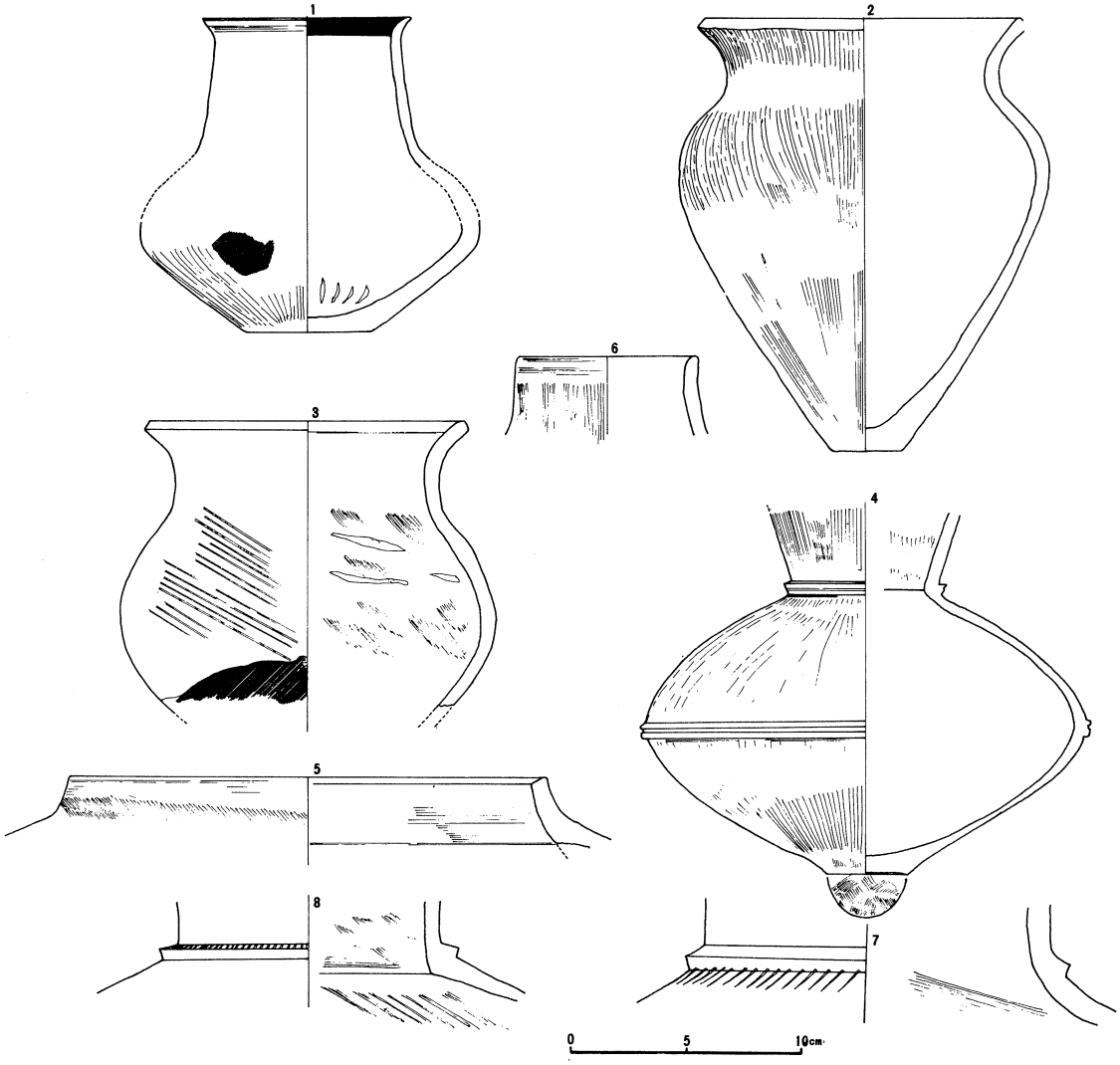
（１）ピット状遺構以外出土の弥生式土器

壺形土器（Ｆｉｇ１の１）

この壺形土器はピット状遺構以外から出土した唯一の土器である。恐らく古墳築造に際して客土による墳丘造成がおこなわれているので、その中に含まれていたものと解するのがより理想的ではなかろうか。このような例は、三島神社古墳にも認められたことである。三島神社古墳においては、墳丘の客土中に縄文式土器と共に弥生前期の土器が出土している[(註12)]。

この壺形土器は板付式土器の影響を受けたものであり、上肩部が欠けているものの口径９cm、最大胴径14.7cm、底径5.4cmで、口縁部は余り発達せず、わずかに口縁端がゆるやかに外反し、その断面は鋤先状を呈し頭部が比較的長い。上肩部は欠けているので有段であるか否かを決めることはできない。胴部から底部にかけては急に絞られた形となっている。底部は平底である。表面は箆状用具で研磨調整されており、口唇部の内面端には朱が施されている。胎土、焼成、色調共他の土器と

Fig 1　天山北遺跡出土の弥生式土器実測図



は全く異質のものである。

形態的には県下では宇和町横田遺跡[註13]や金比羅山遺跡[註14]出土の重孤文土器に近いものであるが、器壁は一段と薄く、朱が施されている点や、頸部が若干異なっている。この壺形土器は少なくとも前期でも最も古式に属し、松山平野における木葉文土器に先行する土器形態を示唆しているといえるのではなかろうか。

（２）ピット中出土の弥生式土器

ピット中から出土した弥生式土器は大別すると甕形土器２、壺形土器７、台付壺形土器１、高杯６、器台３の割合となる。

①甕形土器（Ｆｉｇ１の２～３）

⑵の甕形土器は完形品であり、口縁部は「Ｓ」字状にゆるやかに外反し、胴径が口径より大となっている。その最大径は肩部に近いところにあり胴部から底部にかけては余り膨らみを有していない。施文手法は全く認められず、全面にわたって櫛状用具によって調整されている。底部は平底である。⑶も口縁部の特徴は⑵と同様であるが、胴部の最大径が中央部にある点が若干相違している。文様は殆んどなく、胴部に斜走する幅の狭い繊細な敲きしめ条痕が残存している。これらの甕形土器は、西日本の弥生後期初頭の土器と一体をなすものであり、余りローカル色は認められない。香川県の大空式や東予地方の八堂山Ｉ式、南予地方の村島式、岩木Ｉ式、更に南四国の神西式と殆んど同じ形態を有している。

②壺形土器（Ｆｉｇ１の４～８・Ｆｉｇ２の９～10）

壺形土器は７点出土しているが、１個を除いては細片であり形態そのものを十分伺い知ることは不可能である。

⑷は頸径6.5cm、胴径19.5cm、底径3.6cmの算盤玉形をした長頸壺形土器である。頸部下には三角凸帯を持っている。最大胴径部には中央に凹線文を有する凸帯が貼付けられている。器壁の厚さは出土土器中最も薄く、下腹部ではわずか２mmの部分もある。器壁表面は櫛状用具によって研磨され光沢を持っている。この壺形土器に類似する土器は愛媛県下では今までに発見されておらず、今回が初見である。同じ北四国の大空遺跡からは、これとほゞ同様の土器が出土している[註15]。⑸は無頸壺形土器に近く、口縁部が退化してしまっている。⑹は口縁部が直立し、長い頸部と口縁部が区別しぬくい。施文は全く認められず表面にわずかに櫛描の調整痕が残存している。⑺は頸部から上肩部に相当するもので、頸部下に三角凸帯が貼付けられている。凸帯の下限には凸帯貼付を容易にするために、押圧した浅い刻目を施文のごとく持っている。⑻は形態的には⑺と殆んど同じであるが、頸部から肩部に至るところで角度を持って膨り出している。

頸部ないし胴部に三角凸帯を持つ土器は、愛媛県下でも弥生後期の八堂山[註16]や村島[註17]等から普遍的に出土している。

③台付壺形土器は（Ｆｉｇ２の11）

台付壺形土器は胴径21cm弱の算盤玉形の胴をした壺形土器に器台形土器を組み合せたものである。胴部には２本の凸帯を持ち、更にその間に２本づつの縦の凸帯を６セット持っている。脚部は逆漏斗状に大きく開いて安定している。脚端近くには２個が対になった円孔が６ヶ所ある。

この台付壺形土器は⒁等の器台形土器に⑷の長頸壺形土器を載せた形態からヒントを得て、これを一体のものとして意図的に製作したものとみてさしつかえなかろう。このことから台付壺形土器の形態的な発生の過程をも知ることができる。これに類似する土器は県下では発見されておらず、香川県の大空式の壺形土器[註18]にそれを求めることができる。

Fig 2　天山北遺跡出土の弥生式土器

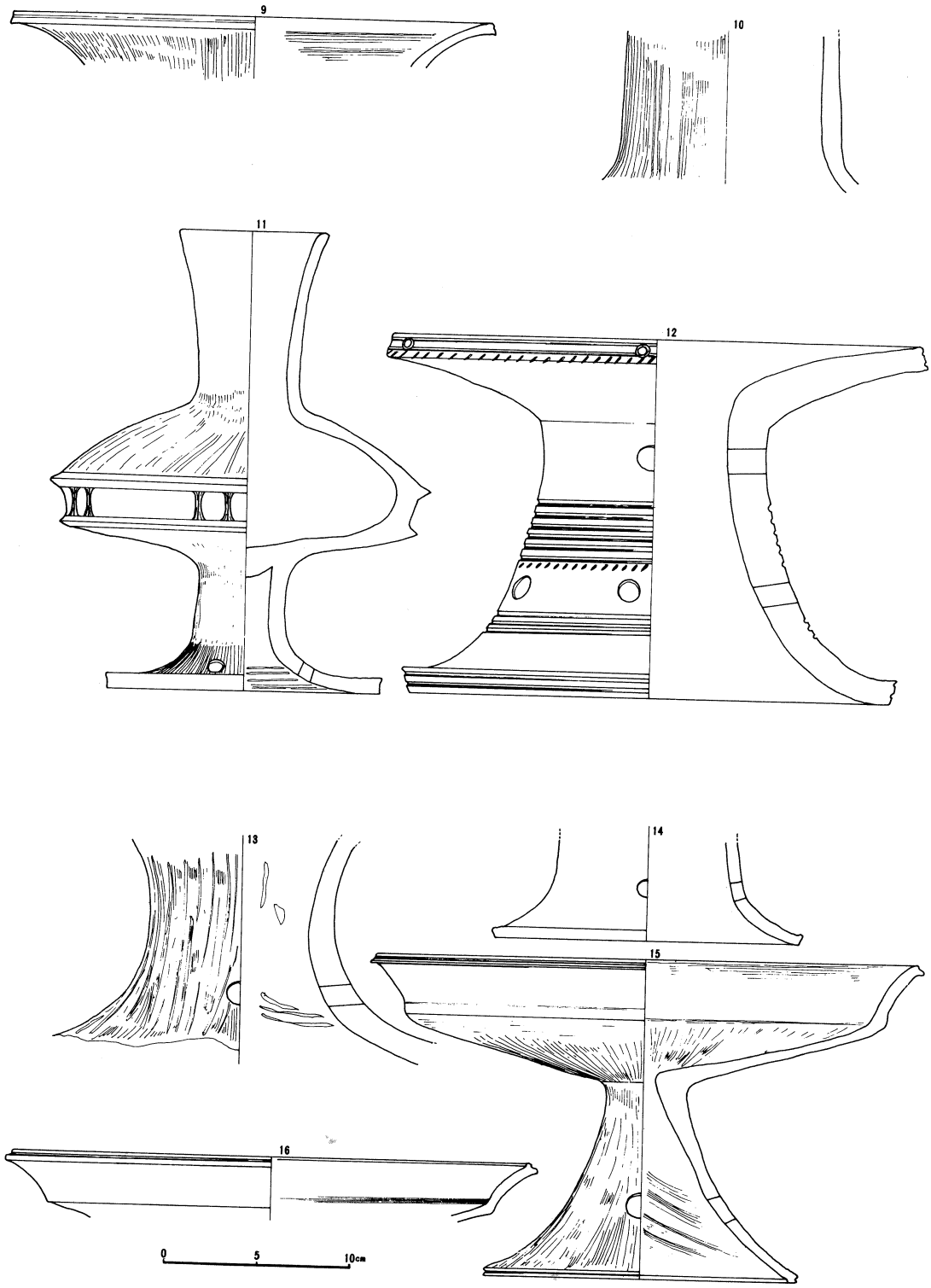
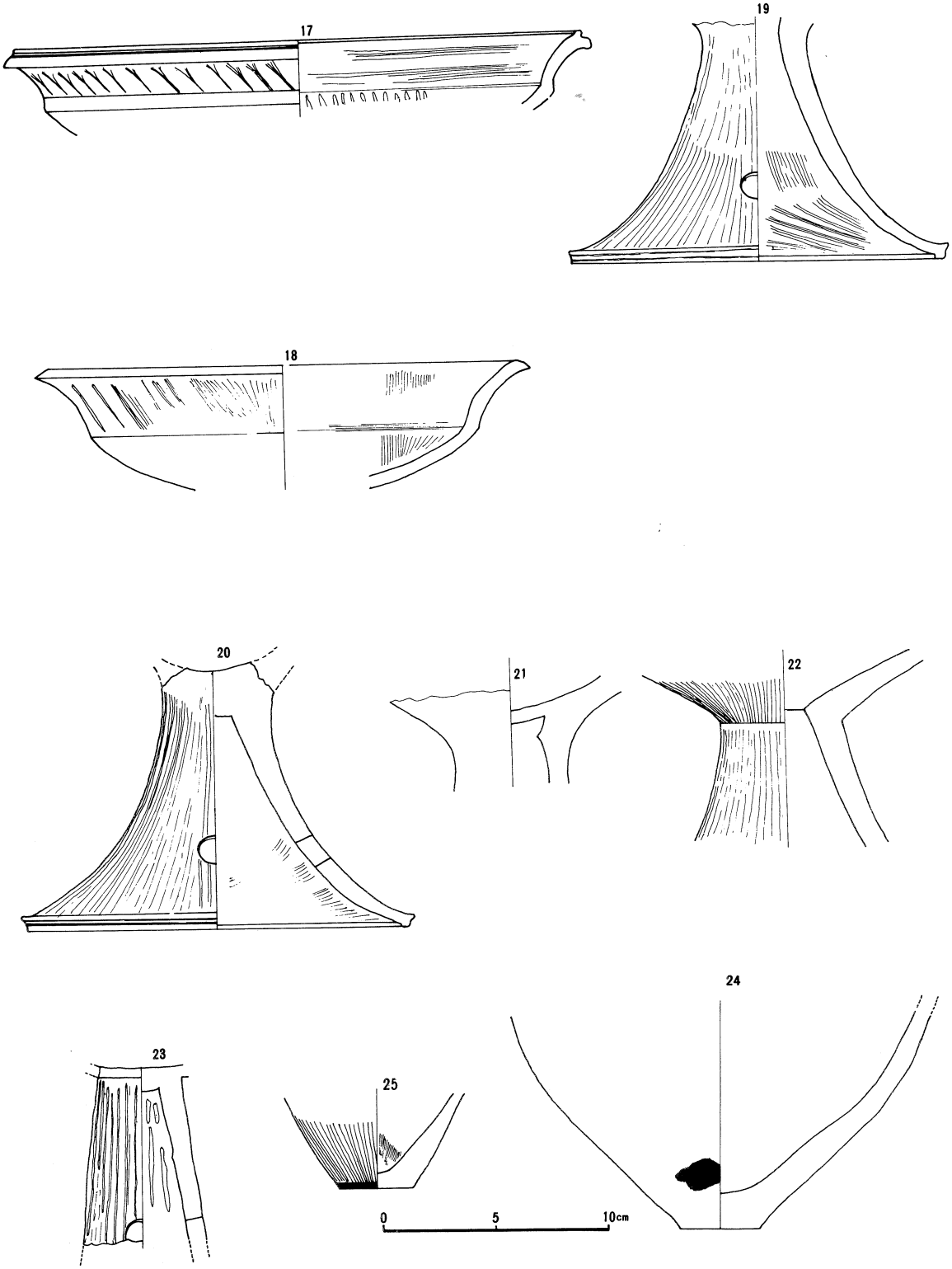


Fig 3　天山北遺跡出土の弥生式土器



④器台形土器（Ｆｉｇ２の12～14）

⑫は完形品であり、脚径24cm、口径28.5cm、最小胴径12cm、器高19.5cmの大形品である。脚端は２本の凹線を持ち、上脚部にも細い３本の凹線を有している。更に胴部の中央部分にも６本の凹線をめぐらし、その下限に連点文が連続して施されている。胴部と上脚部の凹線の間には２孔が対になった円孔が６群あり、上頸部下にも４個の円孔が穿たれている。頸部から口縁部にかけては大きく「く」の字形に外反し、口縁端には脚端と同様２本の凹線を持ち、この凹線の間に小さな二重円形文が２個づつ４群押圧施文されている。口縁部下端には連続して刻目を持っている。

⑬は上脚部から頸部にかけてのものであり、⑫とは異なり凹線を持たず、円孔も上脚部に４個穿たれているのみである。器壁表面は細い竹箆で調整している。⑬は⑫の簡素化されたものであろうが、時間的には差位はなかったといえよう。⑭は高杯とみなすことも可能であるが、脚部の広がり方が他の高杯等と相違しているので器台形土器としてここでは理解しておきたい。

愛媛県下では⑫のような大形の器台形土器は初めてであり比較検討する資料に欠ける。しかし、香川県の大空遺跡や岡山県下[註19]ではその発見例がかなり知られており、それらからすると弥生後期前半に位置づけられる土器とみて問題はないであろう。

⑤高杯（Ｆｉｇ２の15～16・Ｆｉｇ３の17～23）

高杯はその数が比較的多く６個体分出土している。このうち⑮は口径29cm、脚径16.5cm、器高17.5cmの大形品である。口縁部はゆるやかに外反しており、口縁端と脚端には細い退化した凹線を１本づつ持っている。杯部の基底部中央は径12cmの穴があいて脚部内側と通じている。この高杯は本来の形態とは相違しており、台付壺形土器と共に興味ある形態を示めしている。

⑯は高杯の口縁部であり、⑮と同様に口縁端に退化した細い凹線を１本持っているが、口唇部がわずかに立ちあがっている。⑰は口縁部が今までのものに比較するとやゝ強く外反している。口縁端の凹線や口唇部の立ちあがりは⑯と同様であるが、口縁部下に他の高杯にみられない薄い松葉状の文様が連続して施されている。⑱は他の高杯に比較して口径がやゝ小さく、かつまた杯底が球面に近い形態を呈し、口縁端には凹線を持たず鋤先状に外反している。⑲・⑳は高杯の脚部であるが、共に脚端面には退化した細い凹線がかすかに残存している。高杯の脚径はいずれも17cmで共通しており、器壁もすべて櫛状用具で調整している。㉑・㉒・㉓も共に脚部であるが断片に過ぎないので何んともいえない。ただ㉒は⑮と同様、杯部の中央に径 1.7cmの孔が開いていて杯部と脚部が通じている。㉓は他の脚部とは異なり、円筒状の長脚の高杯であったものとみられる。これらに類似するものは器台や壺形土器と同様岡山県や香川県の大空遺跡からも出土しており、県内では八堂山Ｉ式土器にもそれが認められる。

⑥土器底部（Ｆｉｇ　３の 24～25）

㉔は壺か甕形土器の底部でないかとみられる。底径は3.5cmで焼成も悪く、全くの無文である。底部に近い側面に小さな黒班が認められる。㉕は甕形土器の底部であり底径は 3.2cmで全面に櫛状用具による調整痕が顕著に残存している。器壁は薄く焼成は良好である。底部は単純な平底である。

〔３〕出土遺物についての若干の考案

遺構そのものについては前述したごとく完全に破壊されていたのでこれを明らかにすることができなかった。しかし、出土した弥生式土器には興味ある特色を有するものが数多く存在した。特に台付土器の発生が器台と長頸壺形土器のセットにあり、それを素形として新しい土器形態が生れたことを証明している点貴重な資料であるといえる。

天山北遺跡出土の弥生式土器のうち、古墳の封土中から出土した前期前半の、それもより古い時期のものとみられる壺形土器は、松山平野における木葉文[註20]や綾杉文系統[註21]の土器に先行する土器の形態を示唆しているといえよう。

ピット中から一括して出土した弥生式土器はいずれも弥生後期前半に属するものである。しかし、愛媛県内の同時期に盛行していた東予地方の八堂山Ⅰ式土器[註22]や、南予地方の岩木Ⅰ式土器[註23]とは基本的にはそれほど顕著な差異は認められないまでも、壺形土器や器台形土器にあらわれた特徴から別の型式を設定する必要があるように思われる。それゆえ天山北遺跡出土のこのような特徴を持つ土器を天山式土器と仮称したい。

中予地方の天山式土器と東予地方の八堂山Ⅰ式土器との相違は、八堂山が中期後半の桧端式の流れを汲むのに対し、天山式は八堂山の影響を受けつぎながらも中国地方の上東式や白江Ⅰ式[註24]の影響をもより直接的に受けついでいる点である。八堂山Ⅰ式に台付壺形土器や器台形土器が伴なっていないのは、八堂山遺跡が高地性遺跡であるという特殊性以外に、これらが伝播する以前、すなわち、時間的にやゝ先行していたのではないかと考えられる。

大洲盆地を中心に分布する村島式土器は、南四国の神西式土器に酷似する岩木Ⅰ式土器と、天山式土器の影響下に形成されたローカル色豊かな土器形式といえるのではなかろうか。

出土した弥生式土器の形態的な分類はすでにしたが、これらを通観してみるに、甕形、壺形土器はあるにはあるがその数は比較的少ない。これにかわって台付壺形土器や高杯器台形土器といわれる献供的色彩の濃厚な土器が多く出土している。このことは他の遺物が全く併出しない点とを考えあわせると、何か宗教的な意味を感じさせる。天山連山を取りまく周辺部には広範囲な遺跡が数多く分布しており、これらの中央に位置を占める天山の山頂は特別な意味を有していたと想像できなくはない。特に東雲神社遺跡の例からするとその感が強く意識せられる。

なお、この点については天山第１号古墳のところで今少し触れてみたいと思う。

註１．長井数秋「弥生時代の高地性遺跡に関する先史地理学的研究」（ソーシアルリサーチ１号）1972
註２．長井数秋「古照遺跡予備調査概報」（愛媛の文化第13号）1973
註３．1971年に国道33号線設建現場で発見された遺跡で、複合口縁の壺形土器等が多量に出土した。時期は弥生後期後半のものである。調査は市教委が実施した。
註４．1972年12月から1973年３月まで発掘調査を実施した遺跡であり、弥生中期末の住居跡１．弥生後期の住居跡２．高床式建造物跡５．土拡４や溝状遺構を検出した。特に第２号住居跡では柱や出入口が明瞭に遺存していた。調査は市教委が中心になって、長井数秋、大山正風、森光晴、平松康毅が担当した。
註５．1973年５月、松山市松末町で発見され、発掘した弥生後期の遺跡、市教委が調査を実施。
註6.7.8.　愛媛県教育委員会『愛媛県遺跡台帳』1973
註９．森光晴、長井数秋、平松康毅他、『三島神社古墳発掘調査報告書』（松山市教育委員会）1972
註10．間壁忠彦『岡山県矢掛町白江遺跡』（倉敷考古館研究集報第１号）1966
註11．1972年10月に東雲神社跡から発見された遺跡である。松山城の存在する勝山の東部の丘陸上に立地している。弥生中期の土器を出土する県下でも代表的な遺跡といえる。市教委が調査。
註12．長井数秋「三島神社古墳出土の縄文、弥生式遺物」（三島神社古墳発掘調査報告書）1972
註13．宇佐美繁晴、長井数秋「東宇和郡宇和町永長遺跡についての予察」（西条農高研究報告書第２号）1970
註14．長井数秋「南伊予地方における弥生式土器」（西条農高研究紀要第１号）1966
註15．鎌木義昌、六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」（弥生式土器集成資料編）
註16．長井数秋、大山正風、平松康毅、『八堂山』（西条市教育委員会）1972
註17．註14に同じ
註18．小林行雄、杉原荘介編『弥生式土器集成資料編』ＰＬ31～32
註19．間壁忠彦、間壁葭子『岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告書』（矢掛町教育委員会）1968
註20．松山市持田町出土の木葉文を有する弥生式土器
註21．松山市御幸山東麓から出土している弥生式土器、註20．21の土器は愛媛大学に保管
註22．註16に同じ
註23．註14に同じ。長井数秋「宇和町岩木洞穴遺跡出土の弥生式土器に就いて」(伊予史談第168・169合併号）1963
註24．註10に同じ

（文責・長井数秋）

V　天山第１号古墳

天山第１号古墳は前述の通り開墾によって破壊されており、わずかに残存する遺物を収集するのが精一ぱいの調査であった。残存する西半分の墳丘とて、開墾によってかつての形態は全く失なわれており、更に加えて墳丘の範囲を推察することもできない。たゞ石室西方の断ら切られた傾斜面の地表下30㎝に埴輪片が埋没していた。これを目安に計測すると石室中央部から約11.5ｍであった。

しかしこの埴輪が墳丘端をあらわすものでないので確たることはいえないが、埴輪列の直径は23ｍ前後はあったものと思われる。

これはあくまで、現在の状態からの推察に過ぎず、現存する墳丘南部がすでに開墾によって削り取られて平担地化されているので、前方後円墳であった可能性もないではない。

それゆえ現地点では円墳と一応理解したい。

〔1〕　墳　　丘

天山第１号古墳は天山北端の丘陵上に築造されている。残存する西半分の地層からみる限りにおいては、石室は、かつての分離独立丘陵上部の和泉砂岩の風化土中に掘り込んで設置されており、その上部に天山周辺の低地に存在する黒色ロームを墳頂部分で 1.2ｍの厚さに客土して封土としている。このことから自然の地形を利用して封土そのものを余り高くする必要がなかったものと考えられる。

この地点は標高49.50ｍの高さを有しており、松山平野の北部と西部を眼下にする地点であることも、古墳立地の上から重要な位置を占めていたものと思われる。

墳丘構築に関しては、北方 1.6㎞にあった三島神社古墳のごとく複雑な封土の状態を示していなく簡単である点が対象的である。

なお墳丘上に客土されている封土が黒色ロームであるのは山頂まで客土するのに比較的軽い土質であったからではなかろうか。

〔2〕　内部構造

内部構造も墳丘と同様調査時点にすでに完全に破壊されていて、その本来の形態を確認することはできなかった。しかしわずかながら石室の平面プランを推察することができたのがせめてもの収穫であったといわずはなるまい。

残存する基床面のプランからすると主軸方向はほゞ南北を指向している。石室基床面のプランは長さ約190～200㎝、幅140～150㎝の範囲中であると推測される。

この古墳の石室は竪穴式石室であるのか、横穴式石室であるのかは定かでない。たゞ、渡部氏の話を参考にするならば、羨道とみられる遺構は存在しなかったとのことである。玄室の南半分は鶴嘴によって破壊されており、基床面を確認することはできなかった。右室の北半分はかろうじて破壊直前であったが基床面はほゞ原形を保っていた。石室北半分は残存していた土砂を約３㎝発掘することによって副葬品と共に和泉砂岩と花崗岩の小さな川原石が全面にわたって敷きつめられていた。石室北端にある鉄剣の北側は一部開墾によって攪乱されていたが、敷石跡の窪みと、その一部がわずかに残っており、そのことから石室端を推定することができた。東部は川原石による敷石の端が石室内部の東側壁端の限界を示めしているとみてさしつかえない。

東側壁の南隅より南壁の基床面には、石積の第１段目の石が10個ほど遺存していた。

しかし、南側壁面の石のうち３個ほどは、移動の跡が認められないことから、南壁をこゝに求めることが妥当である。他の基床面に乗る石は、開墾に際し、石室の石を除去するため、鶴嘴を打ち

込んでいることから、若干移動している可能性もある。西部は墳丘が残存し、その墳丘の土砂の崩壊を防ぐ目的で、石垣が構築されていたので調査を実施することができなかった。土地所有者の渡部氏の話しからすると、石垣のすぐ西側約30cmのところに石積が残っていて、それらを取り除いた跡に石垣を積んだとのことである。それを証明するため、北部で約30cm西方へ試掘を実施してみた。その結果、15～20cmまでの範囲には川原石の敷石が存在していたが、それより西にはそれを認めることができなかった。

このことから、石室の幅を、140～150cmとしたわけである。

基床面上に残る石室の築造に利用された石はすべて和泉砂岩ないしは花崗岩であり、それも余り大きい石は利用されていない。

これに対して、石室の石を用いて積まれている石垣の石は、和泉砂岩に若干緑色片岩を含んでいる点にその相違を認めることができる。これら川原石は平均して、40×25×15cmの大きさである。このことから、石室の石積手法は小口積であり、それも横平積手法を用いていると想像される。それらの目地の間隙部には緑色片岩を縦割にした板状の石を詰めに利用したものと考えられる。天井石に使用されていた石は、3個出土している。

いずれも120×200cmの大きさである。この石天井の大きさからしても、平面プランはほゞ妥当なものではなかろうか。

このことから上部にゆくにしたがって縮約して穹窿形なるようにするため石積は横平積手法を採用したものと考えられる。

Fig 4　天山第1号古墳実測図

石材の形状そのものから考えると横平積手法であり、堅穴式石室の構築方法に相通じるものがある。中には厚さ5㎝前後の板状の割石が認められることからもこの想定は間違いなかろう。たゞ南側壁から約30㎝離れたところに2個の石が存在していたことから、これが当初からこゝにあったものと推定すると、羨道の存在も考えられなくはない。

どちらにしても、石積手法は堅穴式石室に近似するものであり、羨道の存在が事実としても、それは、明確な横穴式の石室に伴なう羨道とは言い難いものであろう。

石質は緑色片岩が含まれていることから、これらは少なくとも、重信川以南の砥部川流域から運ばれたものと考えられる。

〔3〕 石室内部の遺物の出土状況

すでに述べたように、開墾によって破壊され、石室の基床面に乗る第1段目の石までも除去された状態であるので、すべての遺物の出土状況を明確することはできない。

こゝではわれわれの調査した石室の床面上約3㎝の範囲におけるもののみについてだけである。床面から3㎝を越えて石室内に存在していた遺物はすべて破壊され、除去されていたとみられるべきであろう。

石室のうち南半分はすでに川原石も完全に除去されており、そこに何が副葬されていたかは知る由もない。たゞ西端部はわずかに床面がいじられず残っており、若干の遺物が出土した。石室内の出土遺物の出土場所を大別すると二群に別けられる。いずれも破壊からまぬがれた場所である。

その一つは石室南西隅付近である。こゝからは押潰された状態で須恵器が一括して出土した。押潰されていなかった土器は開墾によって土砂と共に破棄されたものと考えられる。

出土する須恵器は大形壺付器台が2個と、大形台付壺の脚部2、壺形土器3、杯3、高杯3、である。これらが重なって状態で出土している。

その二は北半分の部分である。奥壁（北側壁）に沿って約30㎝内側に切先を東に、中心尻を西に刃先を内側にして長大な鉄剣が出土した。

この鉄剣の中心部の南部には鉄鏃が3本連らなって出土した。奥壁より内側60㎝の鉄剣の切手近い所に10個の管玉と銀製の空玉が交互に径12㎝の円状に連綴された状態で遺存していた。管玉の南16㎝離れた所の東側壁よりから銅製の鏡が面を上にして遺存し、更にその下には木片が残存していた。

銅鏡と木片は床面に敷かれた川原石上にあったが、若干他の川原石と趣を異にしていた。

それは、いずれも4個の川原石の鋭角部が上になり、木片と銅鏡との間に間隙を設けるよう意図的に置かれていたことである。

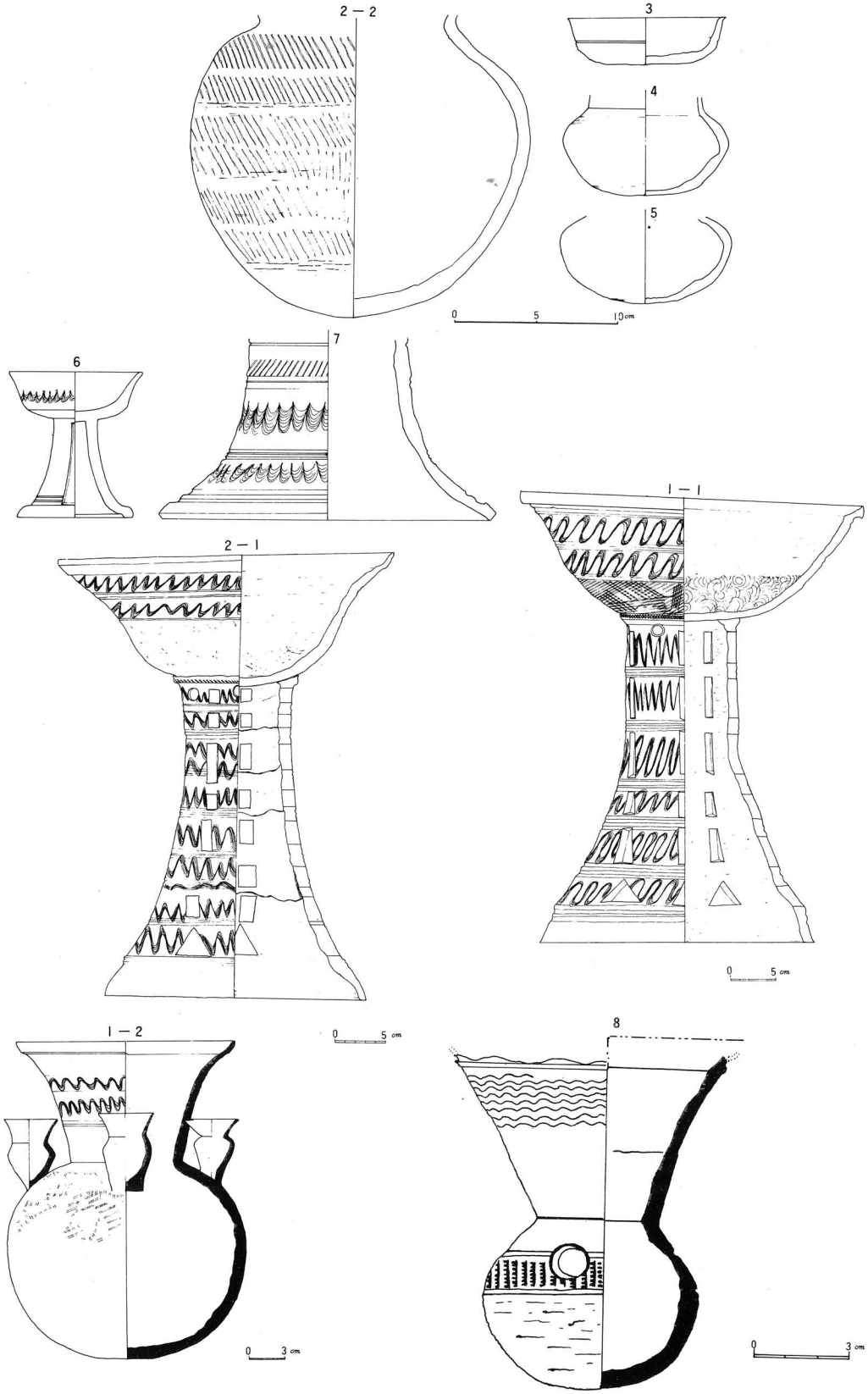
銅鏡の下から木片が出土したことと、周辺から鉄釘が出土したことから、この銅鏡は鏡れんともいわれる木の箱に収められていたものと考えてもさしつかえないのではなかろうか。

銅鏡の南東部には手斧1個と刀子5個、それに大形の鉄鏃1個と鏡板とみられるものが一群となって遺存していた。更にその南部の東側壁の第1段目の石積中から合計30個をこえる鉄鏃が一括して出土した。

鉄釘は銅鏡周辺と共に東側壁よりに連続して出土し、更に南壁よりからも1本出土している。これら鉄釘は30数本が列状に分布していることから、石室内には長方形に近い木棺が存在していたことが想像される。

以上が、本古墳の石室の床面上から出土した遺物である。床面の川原石の敷石下からは何んら遺物は出土しなかった。川原石の下は平担に切削らされた地山面があらわれ、特別の遺構とみられるものは確認できなかった。

Fig 5　天山第1号古墳出土の須恵器実測図



これら以上の遺物の出土状況を通観するに、人骨片は全く出土していないことから、いかなる状態で遺体が埋葬されていたかは不明である。しかし鉄剣、管玉、銅鏡、鉄器、須恵器等の出土状態からみる限りにおいては、頭部を奥壁、すなわち北にして埋葬したものとみてさしつかえなかろう。

特に管玉が円形の連綴状に遺存していたことから、やゝ石室の東側に寄り過ぎるきらいがないでないが頸部がこゝにあったと推察できる。管玉の出土場所を頸部とすると、頸部上に刃先を内側にした鉄剣を配置し、左脇下に鏡をいだいた状態であるといえる。

更に左手の先端部周辺に連続して鉄斧をはじめとする刃子や鉄鏃が一括して置かれたといえる。脚部はその出土は不明であるが、その右側端とみられる所には須恵器が一括して置かれている。

このことから遺物は、無秩序に配置されているのではなく意図的に配置されていたといえよう。なお出土遺物から、被葬者は１人であったと考えられる。

〔4〕 出土遺物

(1)管玉（ＰＬ１）

管玉は合計10個出土している。すべて碧玉製で、色調は淡緑色を量する。10個とも完全な円筒形で全面研磨によって整形されている。孔はすべて一方端のみから穿たれている。長さはいずれも異なり、最長のもので2.78cm、最短のもので2.15cmである。直径は７個が0.75cmで２個が0.72cm、残りが0.65cmである。

(2)銀製空玉（ＰＬ13）

空玉は管玉の間に連綴されていたものである。このうち５個体は確認できたが、１個を除き他は毀損が激しくその原形を伺うことはできない。完全な空玉は径1.22cm、幅0.6cmで扁平な形をしており、両面とも浅く窪んでいる。上下端には連綴のための0.5mmの細い孔が穿たれている。形態的には三島神社古墳出土のものに近いが、接合部分や円縁部に連綴孔がある点若干異なっている。

(3)半円方形帯神獣鏡（ＰＬ15）

被葬者の遺体の左脇下に相当するとみられる場所から鏡面を上にして出土したものである。鏡の計測値は次の通りである。鏡面径19.3cm、図文面径18.7cm、面の反り0.7cm、鈕径3.1cm、鈕高1.6cm、鏡縁厚0.7cm、中央部の厚さ0.2cm。

図文は鈕を繞って獣形の内区を中心としてその外側に半円方形帯があり、外区には銘辞をあらわしている。銘辞帯の外には無文の平縁が続いている。内区は三重巻文に続いて四神四獣と共に四神人を配している。四神人のうち二神人は横向座像であり、残る二神人は正面座像である。五玄武のうち二玄武の頭上には姿の異なる朱鳥とみられるものが図文化されている。半円方形帯の間隙部の空間は唐草文様で満たされている。半円、方形とも８個づつで、方形の部分には銘辞を持っている。しかし、磨滅が激しいのと、鋳造が完全でないためか

?個?宜天王公□と４字のみしか明らかでない。

半円方形帯の外側に続く銘辞帯も推定すると49字前後を持っていたものと思われる。そのうちほゞ明瞭に残る字は23字であり、この他にも数字は将来明らかになると考えられる。

残存する辞文は、

陽覧覩方昭中央、左龍右虎辟不詳、朱鳥玄武順陰陽、服?□□……

で７字句よりなっている。７字句は漢時代の鏡の標本的な銘文となっていたということであり、かつまた左龍……陰陽に至る14文字は北朝鮮出土の後漢時代の『青盖盤龍四神鏡』の銘辞と全く同じである点興味あることである。図文全体の構図そのものは中国出土の後漢永康元年の記年銘のある「半円方形帯神獣鏡」に酷似している。

これらのことから、天山第１号古墳出土の鏡は、少なくとも後漢ないしは三国時代の舶載鏡ではなかろうか。しかし、浅学な筆者にはこれを舶載鏡であると断定するだけの知識はない。ここではとりあえず紹介するに留め、いずれ別の機会にあらためて稿を起したいと思う。いずれにしても愛媛県下出土の鏡としては秀逸のものであり、当古墳の被葬者の身分のほどが理解できよう。

(5)須恵器

出土した須恵器は開墾やそれ以前の自然の落石等によりいずれも小さく毀損している。出土した須恵器は壺付器台、台付壺、高坏、坏、壺等に分類される。

①壺付器台（Fig ５の１－１～２－２）

大形の壺付器台が２個出土している。これらは元来、器台と壺が別個に製作され、器台上に壺を載せたものから発生した形態であるといえよう。外見的には器台上に壺が置かれているようにみえるが、完全に接合しており、初めからこのような形態の土器を製作したものと考えられる。このことは前項の弥生式土器にもすでに認められることである。

２個の壺付器台ともほゞ同じ形態であり、脚部は末広がりに開らくものの脚端では逆にやゝ内反している。器台部分には櫛描による流水文が顕著に着けられている。このような土器はすでに実用から離れた儀器とでも称すべき土器であるといえるのではなかろうか。

②高坏（Fig ５の６）

高坏は細片も入れると３個体分出土しているが、全形を知ることのできるものは２個である。高坏は小形であり、口縁部は心持ち外反し、坏底に近い側面には連綾した流水文を持っている。脚部は大きく外反し、更に脚端部においてそれがより広がりをみせている。脚端は逆に直立ぎみである。透し窓は坏底下より脚端近くまで短冊形に延びている。

③坏（Fig ５の３）

坏とみられるものは破片を含めて３個体出土している。そのうち全形を知ることのできる土器は１個である。口縁部と底部の中間に細く浅い沈線を持つ以外全く文様を持っていない。

④小形壺（Fig ５の４～５）

いずれも胴部の最大径が10cm内外の小形品であり、３個体分出土している。口縁部はやゝ内向的に直立に近い状態を示している。内面には焼成時の膨張突起が多くみられる。

須恵器は石室内に存在していたすべてを発掘したわけではない。実際には何個存在していたのかさえも解らない。しかし出土した須恵器のうち壺付器台のみは県下には比較する資料に欠ける。それを他地方に求めると和泉信太千塚出土のものに酷似し、三島神社古墳出土のものや、大下田１～２号墳出土のものよりもやゝ先行する形態を有している。このことから、須恵器そのものは６世紀中葉に位置づけられるのではなかろうか。とはいっても県下の須恵器の編年が皆無に近い状態であることからして速断することは差し控えたい。いずれにせよ６世紀中葉に近い時期の須恵器が一括して出土したことから、当古墳は須恵器の製作された時期と一致するとみてよかろう。(8)は瓦泉である。

(6)鉄器

鉄器は破壊されていた古墳としては比較的多く出土した。たゞ残念なことには、これら鉄器が集中して出土した地域は左側壁下であり、一部が攪乱されていたことである。出土した鉄器の殆んどが刀子と鉄鏃と釘であった。

①鉄剣（ＰＬ20）

全長113cm、刀身長93cm、中心長20cm、切先長２cmの直刀の大刀である。刀身中央部の棟幅は0.85cmと厚く、棟と刃先の幅は4.3cmである。中央部と中心のところで折れており、全面銹化が激しい。

②大形鉄鏃（ＰＬ19の右）

他の出土した鉄鏃に比べてやゝ大形品である。基部が欠損しているが、形態からすれば有茎であったものとみられる。鏃長６cm、幅3.8cm、厚さは中央部で0.6cmを越している。形態的には有茎の三角形平根鏃に属するものである。このような大形の鉄鏃は松山平野周辺の後期の古墳から比較的多く出土している。特に最近調査が実施された松山市山西の古墳においては、これに類似する鉄鏃が、人骨に突刺ったまゝの状態で２本も発見されている。

当古墳では他の鉄鏃とは別の場所から出土しており、そこに何か特別の機能が考えられなくはないが、山西の例からすると実用的なものであった可能性が濃い。

③鉄鏃（ＰＬ21）

②の鉄鏃と比較すると一段と小形品であり、形態も異なっている。いずれも全長3.5cm～4.0cm幅１cm前後で、茎長は長いもので４cm、短いもので３cmである。形態的には有茎式の柳葉形の尖根鏃である。刃部の下端面にはいずれも共通して浅い腹扶を持っている。

これらの鏃が30数本同一場所から一括して出土したことから、束ねて副葬されたものとみられる。

④手斧（ＰＬ19の左）

ほゞ完全な形態を有する手斧が１個出土している。全長7.5cm、刃部幅４cm、厚さ1.8cmで、着柄部は楕円形状に膨らんでいる。着柄孔は2.4×1.5cmの楕円形で、深さは2.8cmである。着柄孔には一部木質が付着して残存している。刃部は両刃となり、断面は鋭角となっている。

⑤鏡板（ＰＬ16）

馬具の一つである鏡板とみられるものが１個出土している。鏡板の径は８cmで、断面は0.6×0.6cmの方形である。銹化が激しく、そのうえ一部が欠失している。

⑥刀子（ＰＬ18）

刀子は細かく毀損したものを含めると６本出土したが、いずれも若干形態を異にしている。このうち２本は中心部も明瞭に遺存している。中心の外面に木片が薄く付着していることから、柄は木製であったと考えられる。

⑦鉄釘（ＰＬ22）

釘は全部で36本出土している。明瞭な頭を持つものはない。頭部の径は平均すると約0.4～0.5cmで、長さも 3.5cm前後である。全面銹化が激しいが一部に木質が付着しており、かつまた、石室内の側面に沿って長方形に出土していることから、本棺に使用された釘とみられる。一部鏡れんにも使用されたことは当然である。

⑧その他の鉄器（ＰＬ23）

殆んどが刀子ないしは鉄鏃の中心の部分に相当するものである。このうち１点のみ扁平な鉄器片があるが何であるかは不明である。

〔５〕　若干の考察

当古墳は開墾によって破壊されていたため、墳丘形態も内部構造も明らかにすることができず、加えて遺物の出土状態をも正確に把握することができなかった。

それゆえ、当古墳について結論めいたことを述べることは不可能である。ここではわれわれの調査した範囲内において知り得たことについて若干考察を加えてみたい。

当古墳は残存する墳丘の一部と、そこに存在した円筒埴輪の散乱、分布状態から、円墳の形態を有していたとみてそう間違いはないと思う。内部構造については、完全に破壊され、わずかに平面プランを伺うことができたのみである。だが石室構築に使用されていた石材や基床面の平面プラン等から推察する限りにおいては、竪穴式古墳から横穴式古墳への移行期の形態を有する古墳であるとすることができる。羨道とみられる明瞭な遺構が認められなかったことなども、それを補足する

ものである。

当古墳は出土する須恵器の形態や他の出土する副葬品等から後期、それも6世紀中葉から6世紀後半に位置づけることが妥当のように思われる。

古墳の被葬者についてもこれを明らかにすることはできない。ただ古墳の立地や秀逸な鏡等を副葬していたことから、天山周辺に君臨していた有力な統一者の一人であったことは想像に難くない。

天山第1号古墳ならびに天山北遺跡の立地する天山の名が、歴史上に初見されるのは『伊予風土記逸文』中である。

「伊与の郡。郡家より東北に天山あり。天山と名づくるゆえは、倭に天の加具山あり。天より天降りし時、二つに分かれて、片端は倭の国に天降り、片端はこの土に天降りき。よりて天山といふ本なり。その御影を敬礼ひて久米寺に奉れり。」

この逸文からみる限りにおいては、少なくとも8世紀前半において天香具山と同様、天山そのものが敬虔な山であるとされていたのである。しかしわれわれはそこに至るまでの歴史の過程を考えてみる必要があるのではなかろうか。

天山は8世紀になって突如として人々の敬虔する山となったのではなく、その遠い素因はすでに弥生時代にあったとみなすことができる。それは弥生時代後期前半の祭祀的色彩の濃厚な遺跡が存在していたことでも理解できよう。更に続いて古墳時代にもここに古墳が構築されたという歴史的事実があり、それが7～8世紀にも何んらかの形で受け継がれたとしても当然であろう。

このような歴史を有する天山に連らなる土亀山、東山、星岡山の各独立丘陵は、伊予の先史、古代の歴史の故郷であり、私達に何かそこはかとなき郷愁を感じさせる。今これらの山々が開発の波に押されて風前の灯と化そうとしている。愛媛における天山連山の歴史的背影は、日本における大和三山の如き位置を占めているといってもあながち過言ではなかろう。

天山連山は伊予の遠い祖先が綿々と遺した先史、古代文化の宝庫でもある。この先史、古代文化に対するそこはかとなき郷愁、それが私達の郷土を愛する感情ではなかろうか。このことに私達は特に心しなければならない時期にきている。

主要参考文献

「日本古墳の研究」（斎藤忠）＝吉川弘文館
「三島神社古墳発掘調査報告書（森光晴、長井数秋他）＝松山市教育委員会
「大下田第二号古墳発掘調査報告」（大山正風他）＝愛媛県教育委員会
「和泉信太千塚の記録」（森浩一他）＝泉大津高校地歴部
「鑑鏡の研究」（梅原末治）＝大岡山書店
「支那考古学論攷」（梅原末治）＝弘文堂書房
「古墳時代の研究」（小林行雄）＝青木書店
「日本考古学年報20」（日本考古学協会）＝誠文堂新光社
「日本考学年報24」（日本考古学協会）
「宇和町の古墳時代の文化」（宇和町調査団）＝愛媛考古学第3巻第2号
「大下田古墳の調査」（乗松茂）＝愛媛の文化第6号
「風土記」（小島瓔禮校注）＝角川書店
「日の考古学Ⅳ（古墳時代上）」（近藤義郎他）＝河出書房
「日本の考古学Ⅴ（古墳時代下）」（近藤義郎他）＝河出書房
「考古学講座5」（大場磐雄編）＝雄山閣

（文責・長井数秋）

ＰＬ１　久米上空より天山を望む

ＰＬ２　天山第１号古墳を南よりみる

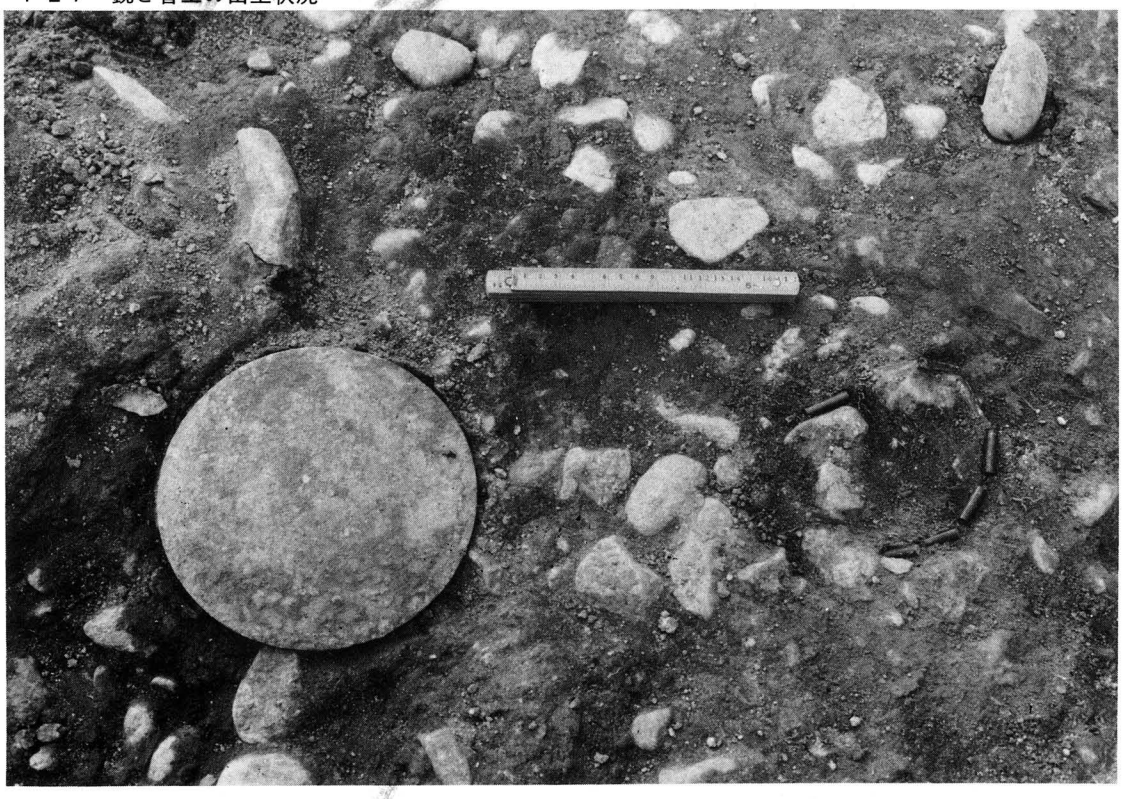
ＰＬ３　天山第１号古墳の基床面

ＰＬ４　基床面を北よりみる

ＰＬ５　遺物の出土状況（東部→西部）

ＰＬ６　西部墳丘上よりみた遺物の出土状況

ＰＬ７　鏡と管玉の出土状況



ＰＬ８　鏡板の出土状況

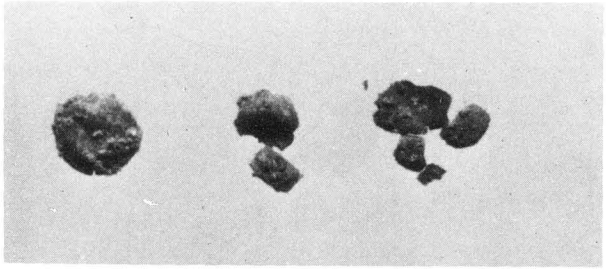
ＰＬ９　刀子の出土状況

ＰＬ10　鉄鏃の出土状況

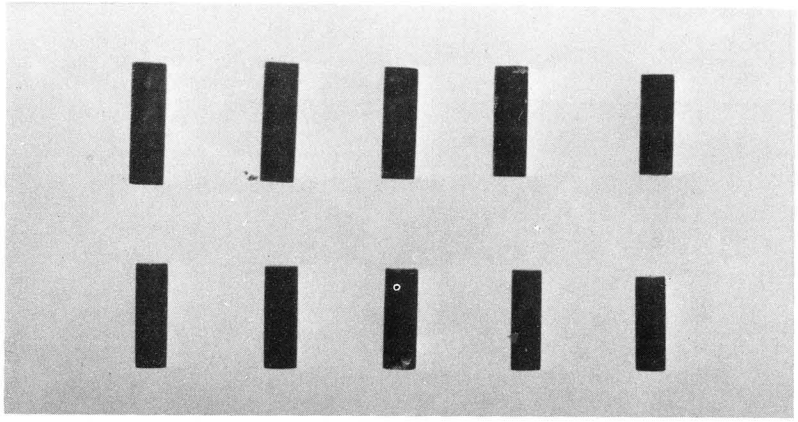
ＰＬ11　手斧の出土状況

ＰＬ12　須恵器の出土状況

ＰＬ13　銀製空玉

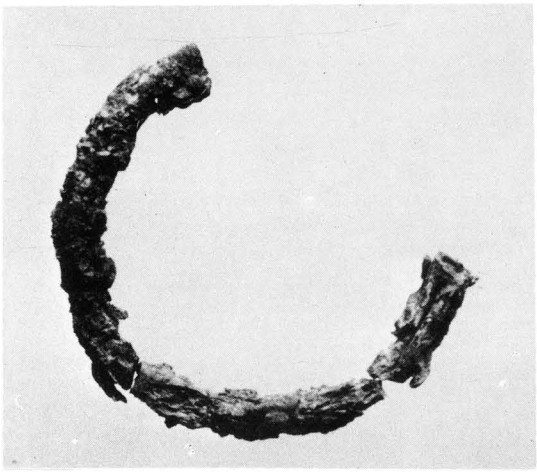


ＰＬ14　管　玉

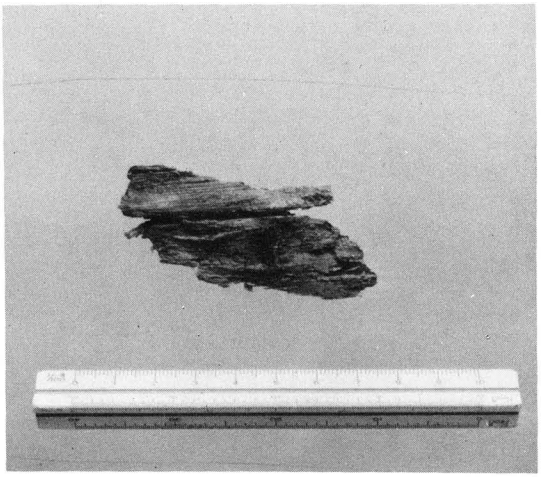


ＰＬ15　半円方形帯四神四獣鏡

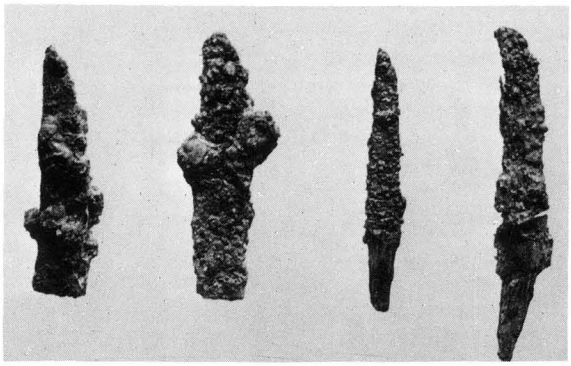
ＰＬ16　鏡　板



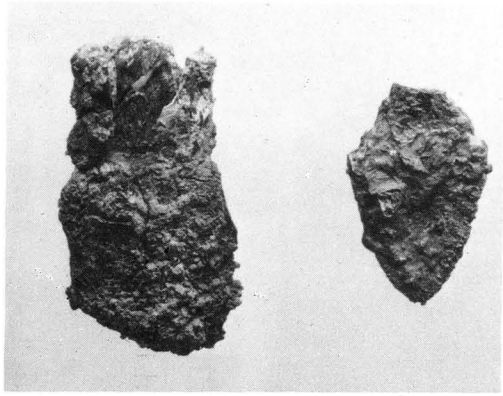
ＰＬ17　鏡の下から出土した土片



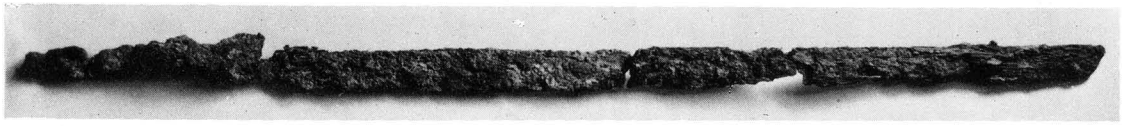
PL18 刀 子



PL19 手斧と石鏃

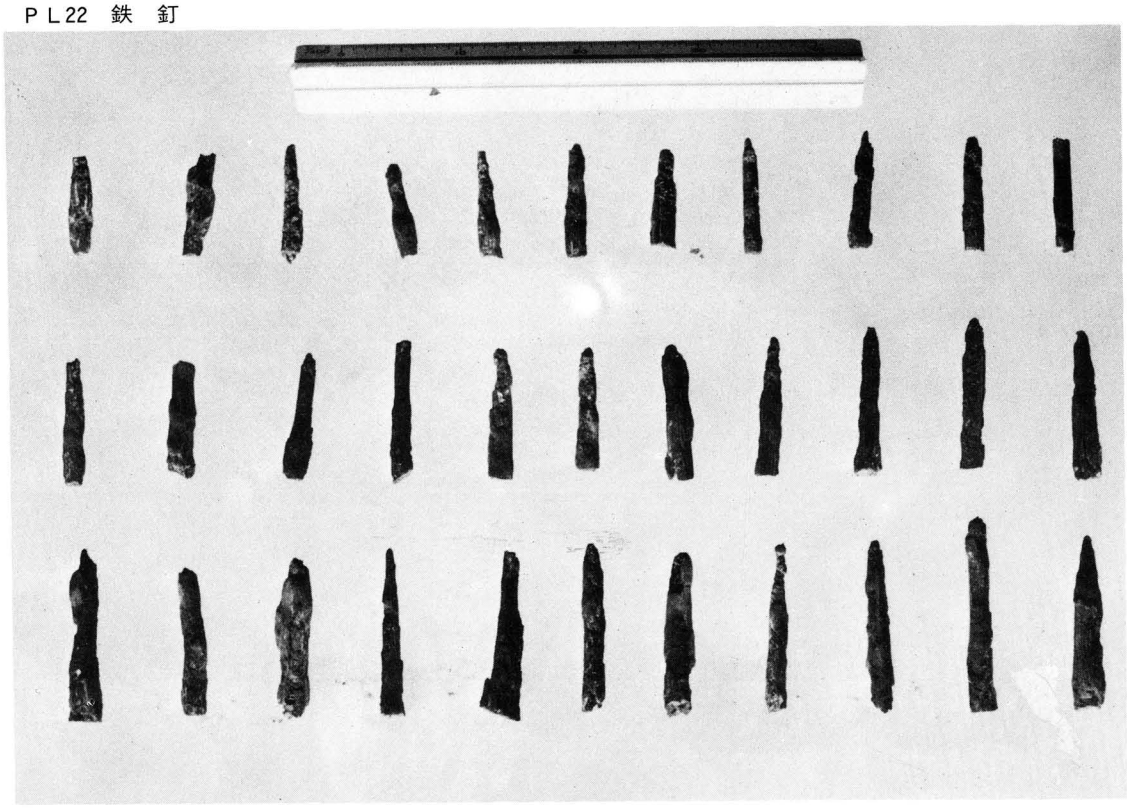


PL20 鉄剣（太刀）

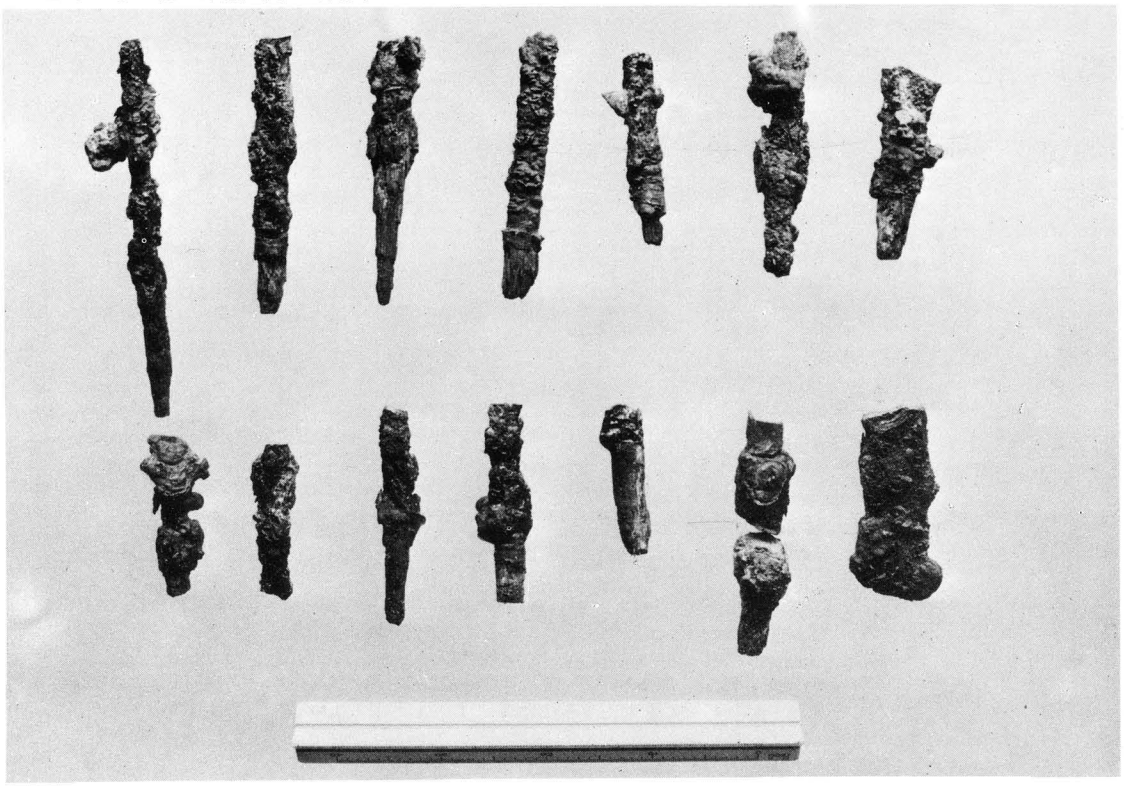


PL21 鉄 鏃

ＰＬ22　鉄　釘



ＰＬ23　その他の鉄器（中心部分）



櫻谷古墳

桜谷古墳調査報告書

Ⅰ　調査の経過……31

Ⅱ　遺跡の位置と概況……31

Ⅲ　各墳墓の状況……32

一、２号墓（古墳一竪穴式石室）……32

二、２号墓（箱式石棺）……35

三、３号墓……35

四、４号墓（土拡墓）……36

Ⅳ　終りに……大山正風……37

桜谷古墳調査報告書

Ⅰ　調査の経過

昭和43年５月、温泉青果道後事業所より、農業改善事業の一環として、貯水筒、及びそれに伴う導水管を設置する地域に半壊の古墳、箱式石棺があるので、適切なる処置をして欲しいとの旨、県教委社会教育課に連絡があり、乗松茂文化係長（当時）の指示により、内部清掃、実測等の記録保存を目的とした本調査を実施した。

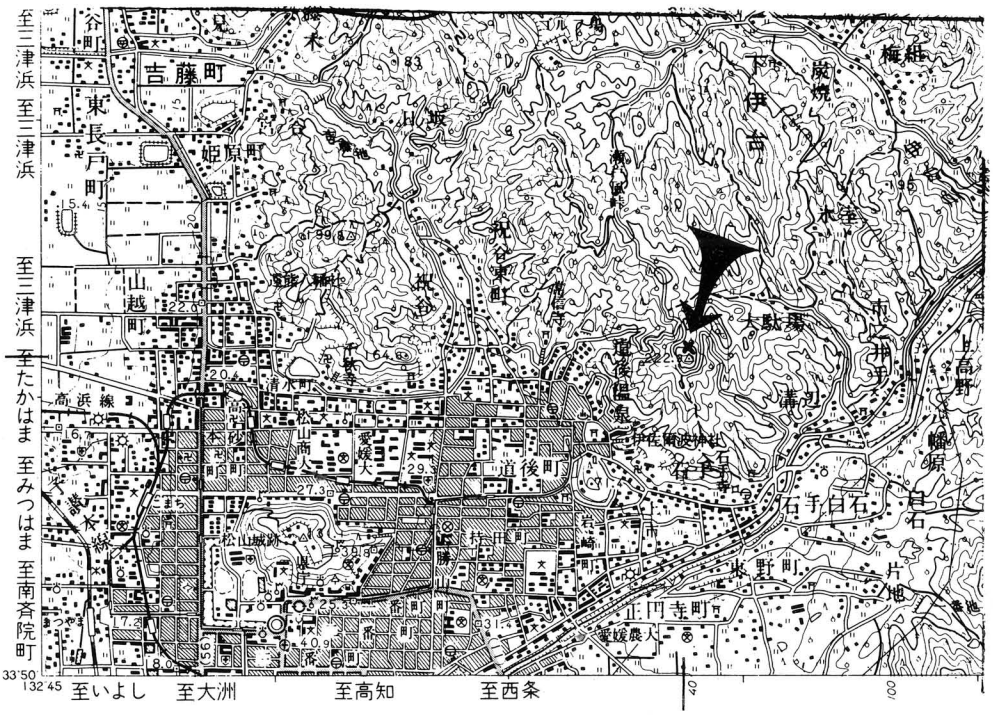
調査には、県文化財保護協会職員（当時）の大山が担当し、県文化財専門委員、西田栄氏の指導を得た。また、調査には松山商科大学史跡研究会の協力を得た。調査後、清掃中発見の遺物、新しく検出された土拡墓については、埋蔵文化財提出書、遺跡発見届を県教委社会教育課へ提出し、遺物については愛媛大学へ保管していただいた。

Ⅱ　遺跡の位置と概況

桜谷古墳の絶対位置は、東径132 47′48 、北緯32°51 14″ の交差する地域であり、標高218ｍの山頂で、松山市内を眼下に望み、行政上の位置は松山市道後字桜谷で地目は山林となっている。（ＭＰ）

調査前の状況は、山頂からの尾根が、雑木林と果樹園に切断されており、その断面に、

桜谷古墳付近の地形



上部を破壊され天井石を石室内部に落した石室、片側壁、及び天井蓋石を露出した箱式石棺２基が露呈していた。同地は２年前に同地所有者の開墾によって、遺構が発見せられていたが、その際には何らの異状もなく、開墾後、盗掘、放置せられたものと思われる。

これらの遺構は、導水管埋設工事によって破壊されるとの事であり、またその工事も目前に迫っており、記録調査を実施するに及んだ。遺跡は南より、桜谷古墳１号墓、同２号墓、同３号墓とし、３号墓調査の際に検出された土拡墓を、同４号墓とした。（**Fig** １）

III　各墳墓の状況

一、２　号　墓（古墳―竪穴式石室）（Fig 2――ＰＬＩ）

(1)　遺　　構

落下していた７個の天井石を排除し、床面まで清掃して石室内を計測した結果、内部全長2.65ｍ、南部（奥壁）基底部幅1.05ｍ、北部基底部幅0.8ｍ、天井石までの高さ1.65ｍ、天井石９個、比較的小さな石の乱石積による竪穴石室である事が判明した。また、石室の石材は、その大半が和泉砂岩であり、花崗岩が11個認められた。東側壁の上部が数段欠損しており、盗掘者は東側壁をくずし、天井石を落し石室内へ侵入したものと思われる。

石室内よりは、落下天井石の下、あるいはその隙間から、次の如き遺物が破損状態で検出された。

(2)　遺　　物

ａ　高　　坏（須恵器）

- 器高13cm、口縁直径10.5cm、坏部深さ3.2cm、脚部裾直径約10cm、無段すかし２条、坏部に凹線を１本配し、その下に櫛目流水文を付す。内部には灰釉焼成がみられ、焼成は金属音がするほど非常に硬質であり、胎土には全く砂粒を含まない。（**Fig** ３―１、ＰＬ２―４）
- 器高13.5cm、口縁直径12.5cm、坏部深さ３cm、脚部裾直径約8.5cm、無段すかし２条、脚部に凹線２本を付す。赤灰色で焼成はやや軟質である。（**Fig** ３―２）

ｂ　高　　坏（土師器）

- 器高10cm、口縁直径12.5cm、坏部深さ3.5cm、脚部裾直径９cm、焼成はやや軟質、赤みをおび、坏部内面には緑青と思われる青緑色顔料が塗布されている。(**Fig**３―３、ＰＬ４―１)
- 器高11.2cm、口縁直径12.5cm、坏部深さ3.8cm、脚部裾直径９cm、焼成は硬質で、内面に緑青が塗布されており、検出時に僅かではあるが、坏部内底部に接して、貝殻が残存していた。（**Fig** ３―４、ＰＬ４―２）
- 器高10.5cm、口縁直径12cm、坏部深さ3.4cm、脚部裾直径9.5cm、焼成は硬質で、上記２

個と共に坏部と脚部の接合の際のひねりが見られる。（Fig 3－5、PL 4－3）

c　有　蓋　高　坏（Fig 3－6、PL 2－2）

坏部のみで脚部欠損、口縁直径17cm、坏部深さ約5cm、内反り高さ1.2cm、坏蓋受口直径14.5cm、同幅0.7cm、表面に青色の灰釉を付着する。焼成は硬質

d　坏　蓋

● 器高6.3cm、口縁直径16.8cm、つまみ直径3.7cm、同高さ1.3cm、凹線を配し、つまみ周囲に放射状にヘラ凹線を付す。盗掘を受けているので原位置が明確でないが、表面に青色の灰釉が付着している事や、その形状からcの有蓋高坏に比定しうるものであろう。（Fig 3－7、PL 2－1）

● 器高4.6cm、口縁直径15.7cm、口縁端がやや外反する。白灰色で焼成は軟質でもろい。盗掘者が意図的に破壊した形跡かり。（Fig 3－8、PL 2－3）

e　装飾人物・動物（装飾付脚付広口壺の肩部に配せられる）

● 高さ5cm、胴部直径2cmで、両眼、鼻、両鼻孔、口を配し、左手は前方へ、右手は腰にまわし、腰には帯と靱が付帯しており、おそらく弓に矢を番える姿勢を表現したものであろう。頭部は髪を束ねて後へ下げており、当時の髪形も伺い知れる。（PL 3—1.3—2）

● 高さ4cm、胴部直径2cmで、両眼、鼻、口を配し、右手は欠損しているが、左手は真横にしており、おそらく両手を拡げていたのであろう。（PL 3－3）

● 高さ2cm、頭部だけであるが、両眼と口を配している。弓を射る上記の人物像から想像するならば、猟犬かあるいは獲物の猪であろうか。（PL 3－4）

f　鉄　鏃（Fig 4－1～8、PL 3－5）

8点検出されたが、完形品は無く、1～8を合せるといずれも尖根で、先1.8～2cm、身7～7.5cm、茎3cmの約12cm内外の鏃である。身はいずれも巻身でその断面は四角形状をなしている。

g　装　身　具（Fig 4－9～11、PL 4－4～5）

装身具については下表の如くである。

種　類	長さ mm	直径 mm	孔径 mm	材　質	色	個数
管　玉	20	5	1.8～0.5	滑　石	青	1
丸　玉	10	13	1.3	木(高野槙)	黒	3
	7	7	0.5	木(　仝　)	茶	3
小　玉	2.5	4.5	0.4	ガラス	青	2
	1.2	2.8	0.4	ガラス	緑	4
						1

h　人　骨　片

人骨片はその大部分が、奥壁、及び東壁基底部に集中していた。これは盗掘者が内部をかき集めた結果であろう。しかし奥壁に近い順に、頭蓋骨、上腕骨、胸骨、骨盤、下肢骨の順で検出されたので、頭を南にした状態で埋葬されたと思われる。人骨片は新潟大学医学部小片保教授に鑑定を依頼した結果、成人男子という所見を得た。

i　そ　の　他

馬具の引手の環と思われる鉄片が検出されたが、形態は不詳。

(3) 土　　壌

付近の土質は、和泉砂岩風化土と花崗岩風化土の混合土壌で、和泉砂岩風化土の混入量が多い。礫を多く含み、地山は和泉砂岩推積土であり、１号墓より南へ20ｍの工事地点では、地表より３～４ｍで和泉砂岩の岩盤に到しており、１号墓西斜面においてもその一部が風化により露出している。１号墓付近の土層は別表に示す。

墳　頂　部		北　方　部（２～４号墓）	
第　1　層	表土(黒灰色、腐植土)	第　1　層	表土（黒灰色、腐植土）
第　2　層	茶褐色和泉砂岩風化土	第　2　層	茶褐色和泉砂岩風化土
以下　黄色和泉砂岩推積土(地山)		第　3　層	灰色腐植土、（旧地表が？）
		第　4　層	茶色和泉岩風化土(含花崗岩礫)
		以下　黄色和泉砂岩推積土（地山）	

(4) 考　　察

石室に関して、平面プランであるが、**Fig2**が示す如くその形状は竪穴式石室のそれよりも、横穴式石室のプランに類似する。また、その石積法も、基底部に大石を使っており、南壁は特に基底部の60cm×60cm大の石から、明らかに奥壁を意味しており、これらを考え合すと竪穴式を取りながらも、新様式の横穴式技法を取り入れている事が伺える。石室全体の構築法は、発掘調査では無いので明らかでは無いが、尾根切断面の層位から、和泉砂岩推積土（地山）を掘り込んで構築されたものであろう。

墳丘に関してはFig 1の測量図の如く、墳丘の西側が、風化・侵蝕による急斜面となっており、東側とは、はるはだその形状を異にする。測量図による全体の形から、前方後円墳を推定するならば、全長14ｍ、後円部直径７ｍの小型ではあるが、古式な形体といえよう。しかし、北方（前方）部の上位２層の土層（盛土？）以外は前方後円墳たる積極的な資料は無く、２～４号墓との関連もあり、現時点では直径７ｍ、高さ約３ｍの円墳と理解したい。

遺物に関しては、その出土数も少なく、また松山地方の各遺物の編年が無いので、断片的にしか把握できない。したがって年代を求め得る遺物は、高坏、装飾人物片ぐらいであろうか、Fig3—4、同3—6は6世紀初頭、装飾付脚付広口壺は6世紀中頃を待たねばならず土師器については全国的な編年ができつつあるので、その結果を待ちたい。竪穴式石室でありながらも横穴式石室の構築法を取り入れている事等を考慮するに、桜谷1号墓は6世紀中葉の造築と考えたい。

二、2　号　墓〔箱式石棺〕（Fig 5、PL 5—1）

(1)　遺　　構

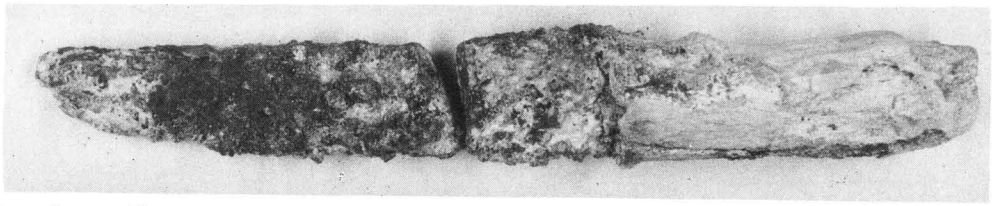
1号墓より、尾根切断面に沿って北西に6mの地点に2号墓がある。既に側壁と天井石の一部が破壊されていたが、内部を清掃した結果、頭蓋骨片と刀子が残存していた。

全長1.22m、内部長1.04m、頭部幅0.65m、同内部幅0.37m、足部幅0.55m、同内部幅0.26m、同高さ0.3m、天井蓋石5枚の小石棺で、小児用の箱式石棺である。石材は総べて和泉砂岩の割石を使用しており、石棺内底部には細い砂礫が敷いてあった。

(2)　遺　　物

a　刀　　子（Fig 9、PL 5—3）

刃渡り9.5cm、柄の長さ約5cmで、柄は鹿の角を用い、形状は6角形、一部分に朱が付着していた。



b　人　　骨

石棺の規模から幼児骨と思われる。新潟大学医学部小片保教授の鑑定所見によると、幼児男子の骨であるという報告を得た。

(3)　考　　察

この箱式石棺はFig9の示す如く、扁平な石を用いた一般的な箱式石棺とは異なり、2～3段の積み重ねによる壁を造っており、箱式石棺と言うよりは小型竪穴石室とした方が妥当に思われる。造築年代は、尾根の層位から1号墓よりは、やや前に位置すると思われる。

三、3　号　墓

(1)　遺　　構

2号墓の足部に接して直交するように3号墓がある。開墾時においてその中央部を開口

していたが、内部に人骨があったのでそのまま放置していたという事であり、人骨を取り上げ、内部を清掃した。

全長1.85m、内部長1.67m、頭部幅0.5m、同内部幅0.33m、足部幅0.44m、同内部幅0.27m同高さ0.27m、天井蓋石5枚、石材は総べて和泉砂岩の扁平な石を使用しており、石棺内部壁面には、全面的に弁柄と思われる顔料が塗布されており、人骨にも着色しており、防腐の目的をもって、石棺内に相当量、投入されていたのであろう。

(2) 遺　物

a　弥生式土器片

頭蓋骨の右下で検出、10cm×8cm×1cm大であり、大型土器の破片であるが、その形態は不詳、焼成は硬質。

b　人　骨

伸展葬されたほぼ完全な一体であり、推定身長約1.5m、新潟大学医学部小片保教授の鑑定所見によって、成人男子との報告を得た。特徴として、上下門歯を欠損しており、石棺内部ではそれを検出する事はできなかった。

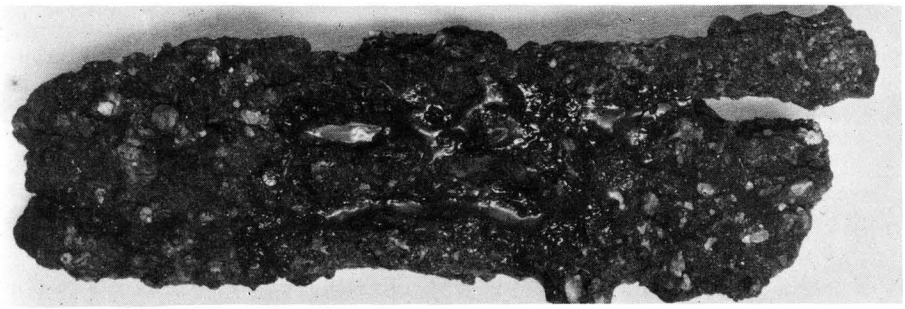
(3) 考　察

2号墓足部と3号墓足部は、互に接して上下に交差しており、層位的にも一層位前に造られたと思われる。頭蓋骨の下から検出された弥生式土器片から、その年代を弥生期に求めてさしつかえないであろう。何故に頭蓋骨の下に土器の破片を置いたのか、意図したものであるか、また、門歯が上下共欠損するは、抜歯の習慣の存続を意味するものか、これらは今後の研究に待ちたい。埋葬状態は成人用としては、余りにも石棺の幅が狭く、両腕は腹部に乗せるかの如く、肩を窄めるような窮屈な状態であったと想像される。

四、4　号　墓〔土拡墓〕Fig 8

全長1.25m、同内部長1.07m、頭部幅0.41m、同内部幅0.3m、足部幅0.31m、同内部幅0.23m深さは調査時において約20cmであり、全体の規模から子供用の土拡墓であろう。

足部より、錆で密着して3個体の鉄鉄を検出した。（Fig9、ＰＬ５―４）長さ約9cm、



先端は柳葉、同断面は三角形状をなし、茎は巻身である。1号墓出土の鉄と比べると、やや先行形式と思われる。

3号墓の掘込を確認中、3号墓より20cm離れて確認されたものであり、開墾によって上部上層が削平されているので、当初の形体は不詳である。

Ⅳ　終りに

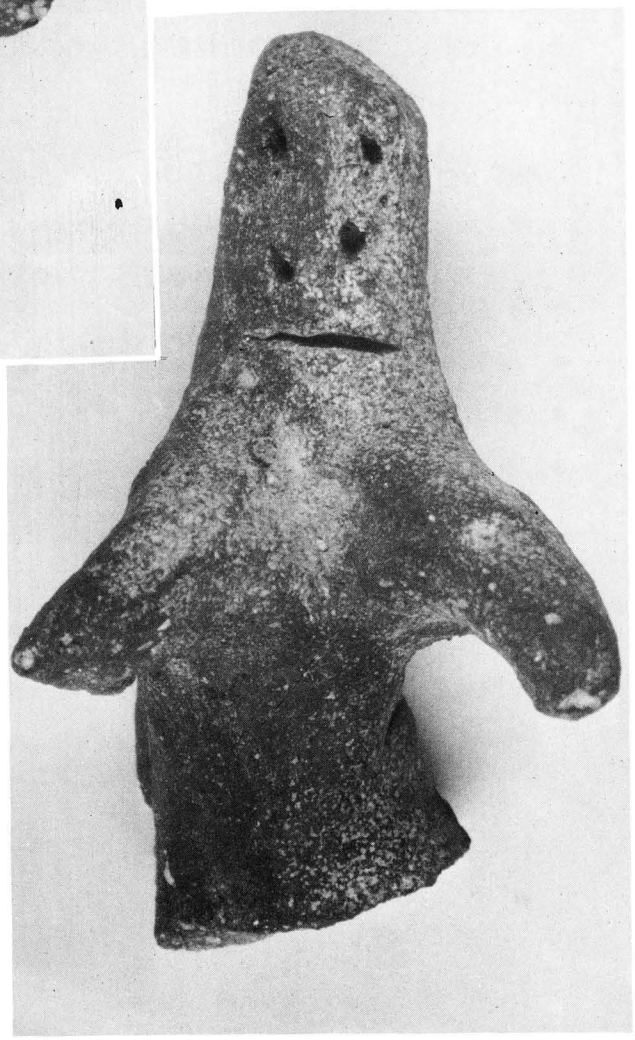
本調査は発掘調査と異なり、導水管工事によって破壊される遺跡を記録保存する主旨で実施せられたのであるが、その調査日数も僅かであり、予算も皆無であり、調査は、山之内秀樹、平林直樹両君をはじめ、商大史跡研諸君の奉仕によって行なわれた。計測も充分とはいえず、遺跡は日を待たずして工事によって破壊され、現在ではその形跡すらとどめていない。不充分ではあるが記録を残す事ができたのが、せめてもの慰めである。その後、本調査を公表する機会も、またその手段も得ず、忘れ去られようとしていた昨今、松山市埋蔵文化財報に記される事となり、喜びにたえません。本遺跡を文化財報に掲載して頂けるよう配慮して頂いた松山市教育委員会社会教育課の御好意に深く謝意を表わしたい。

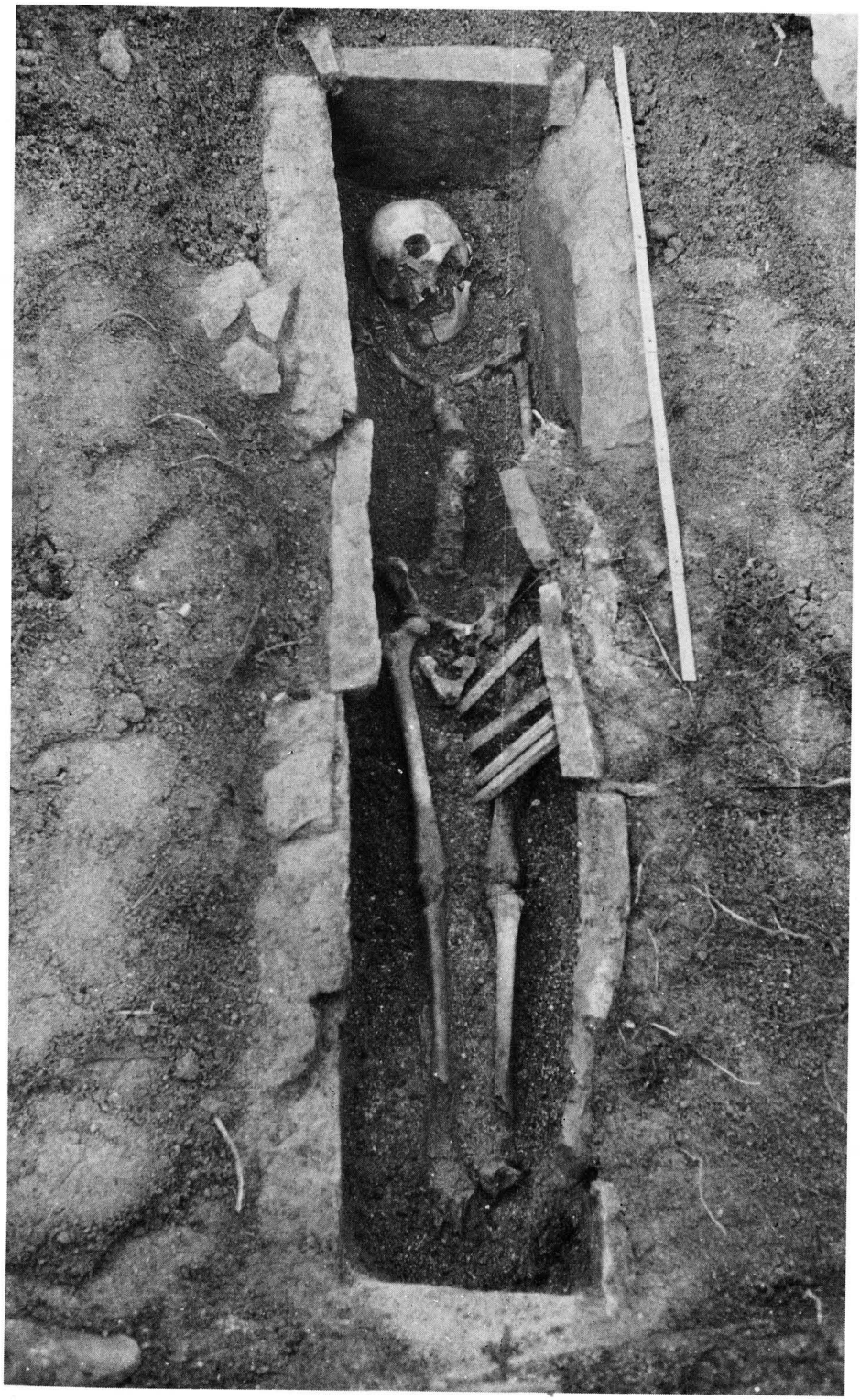
温泉郡川内町立川内中学校教諭

大　山　正　風

参考史料

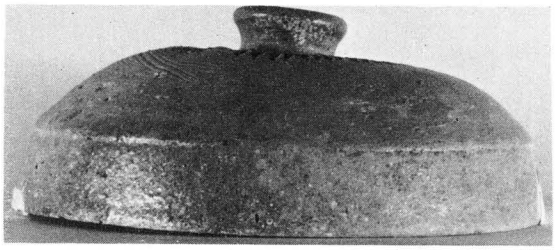
- 世界考古学大系　3　日本　　平凡社
- 日本の考古学　4.5　　河出書房
- 新版考古学構座　5　　雄山閣

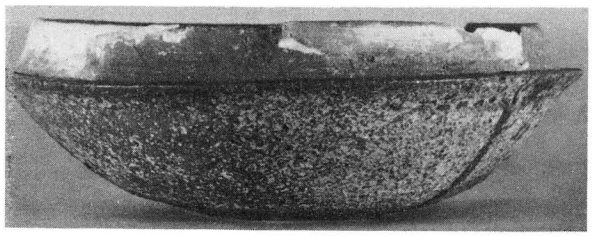


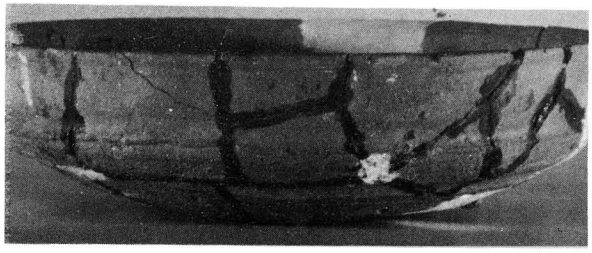


ＰＬ１　調査前の１号墳

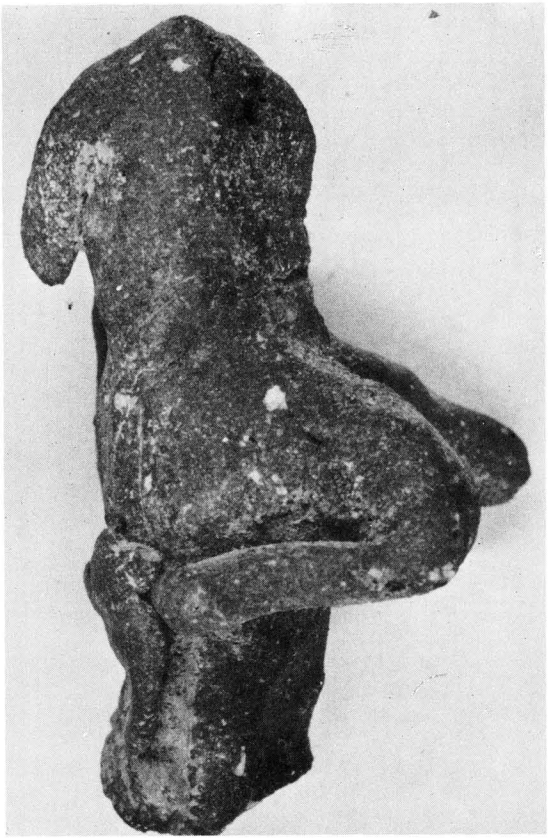
ＰＬ２　出土須恵器

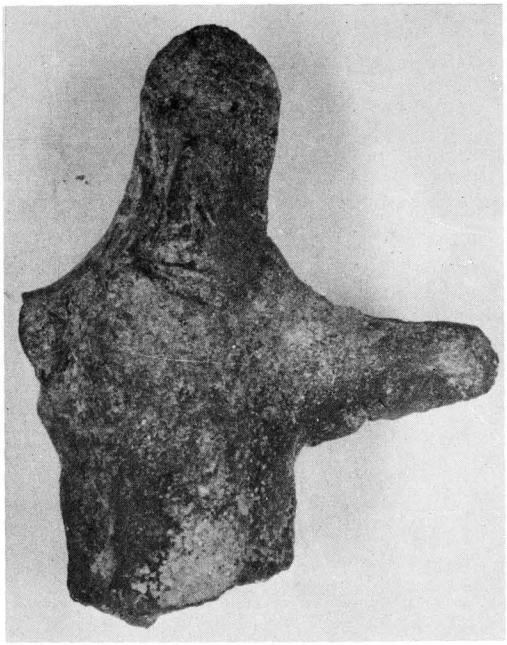


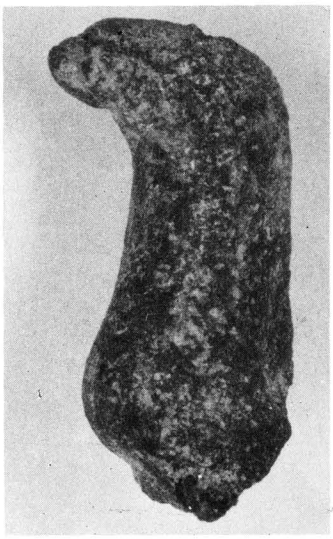


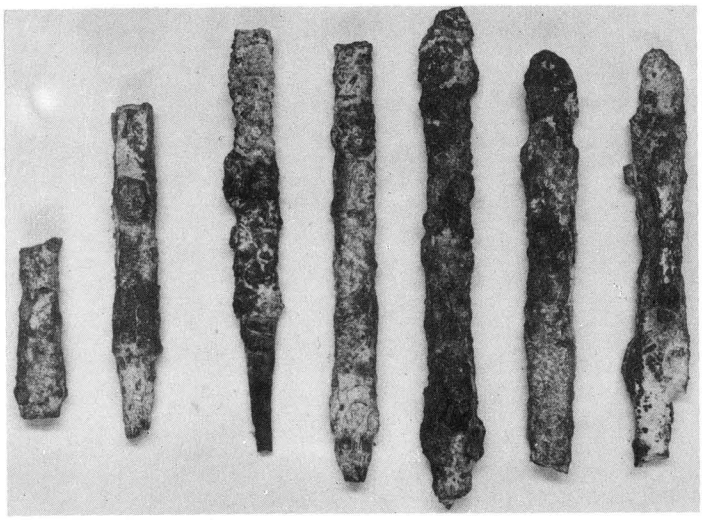


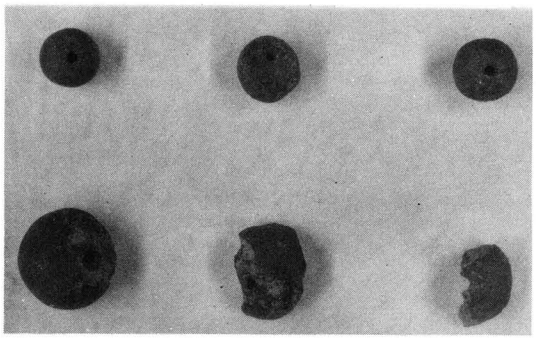
PL 3











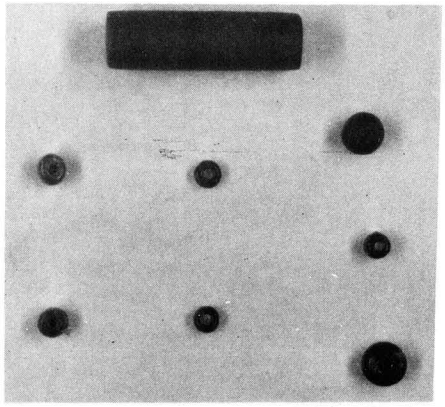


Fig 1　桜谷古墳測量図

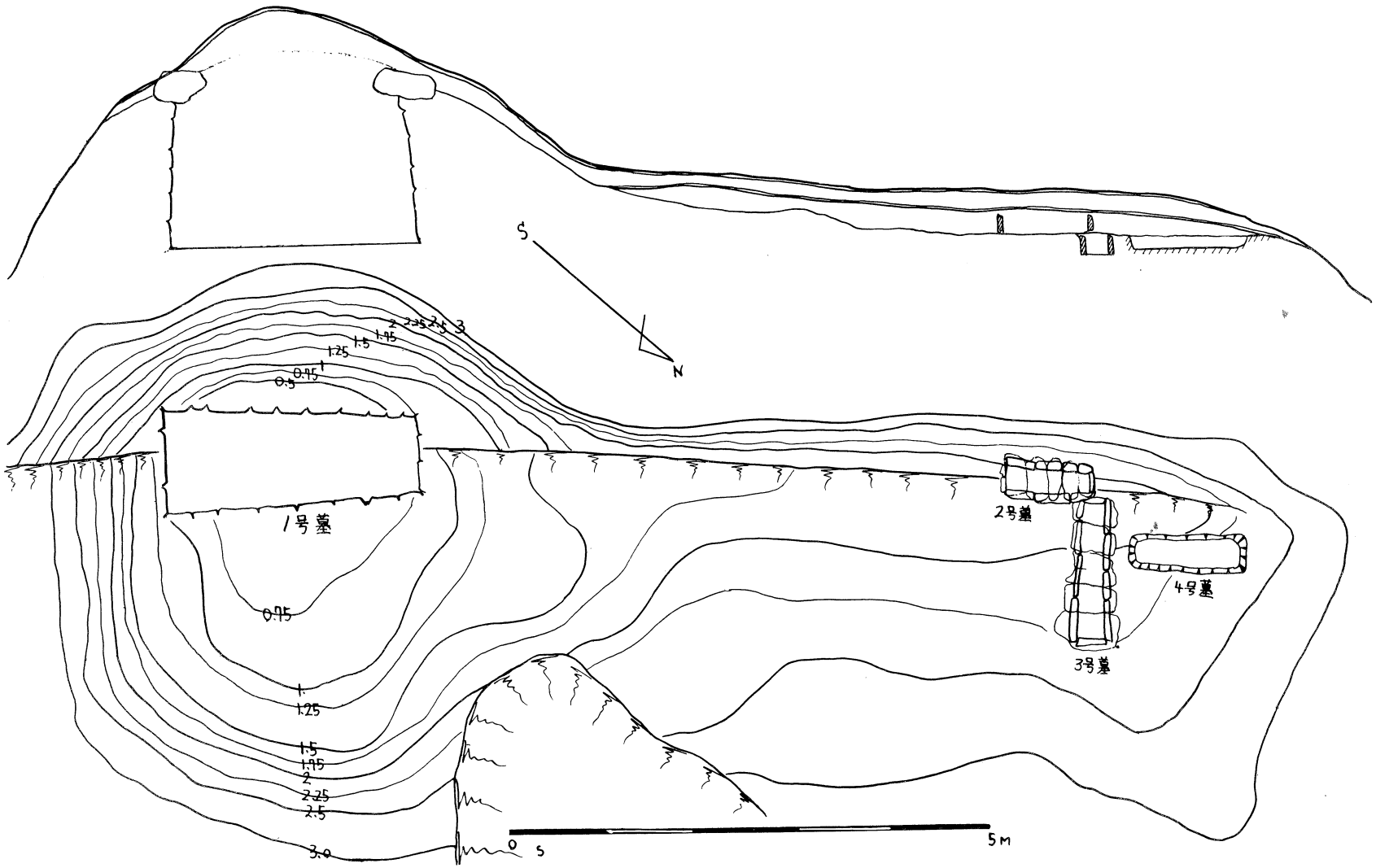
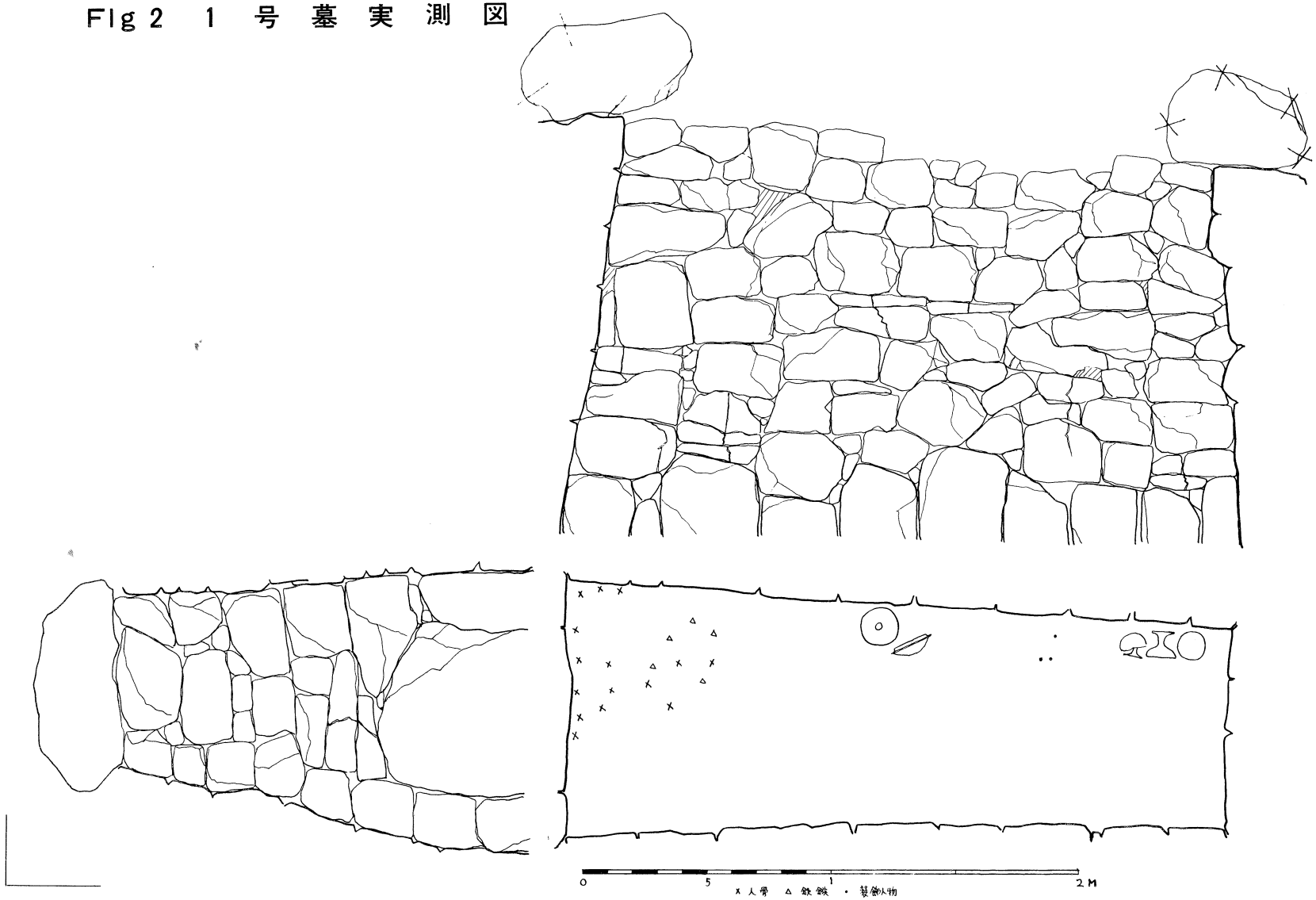
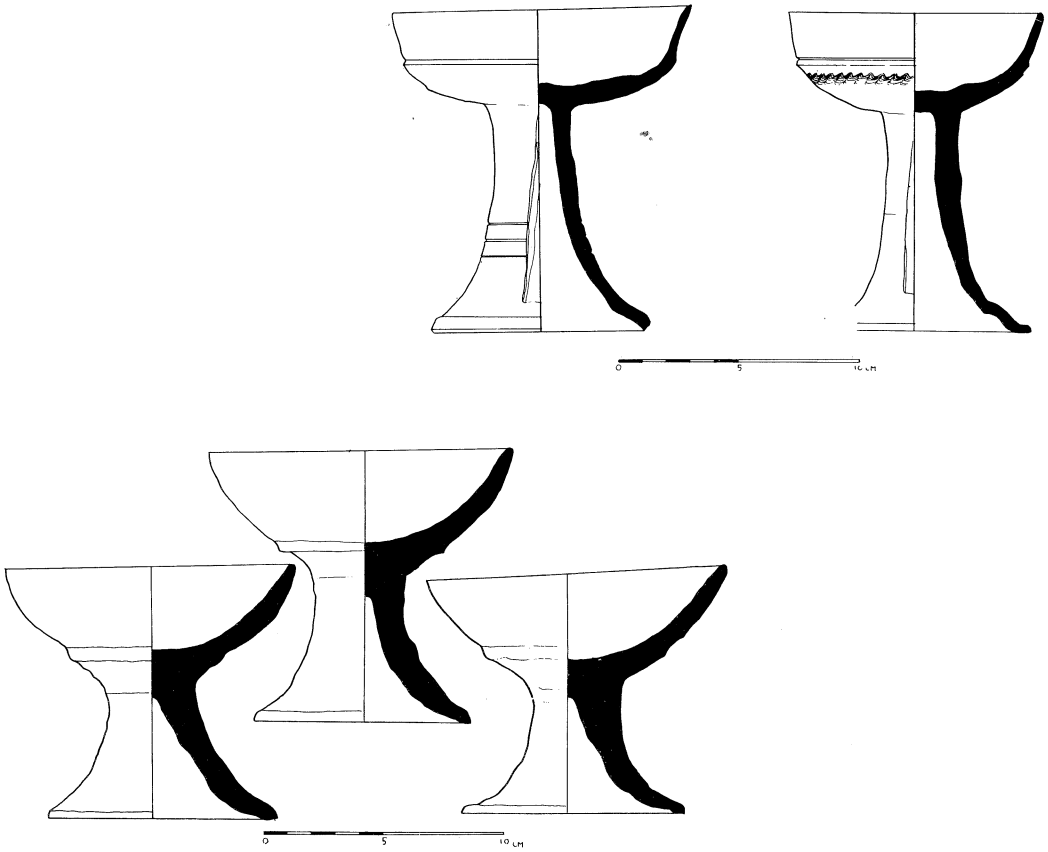
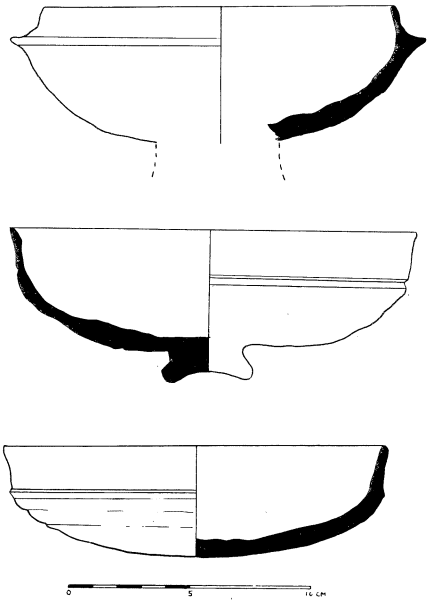


Fig 2　1 号 墓 実 測 図



Flg 3　1号墓出土遺物実測





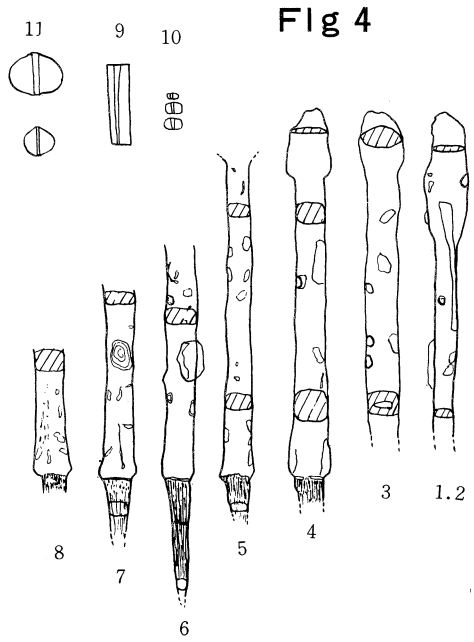


Fig 5　2号墓実測図

Fig 6　刀子実測図

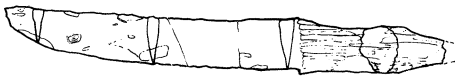


Fig 7　4号墓実測図

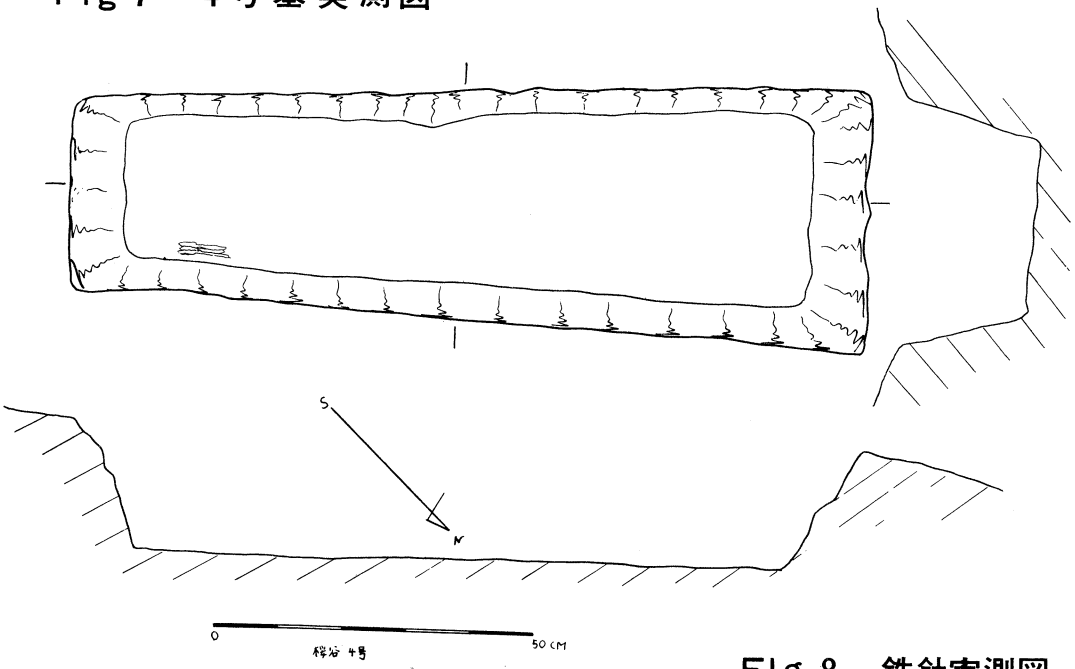


Fig 8　鉄針実測図

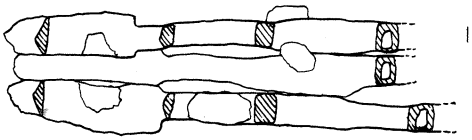
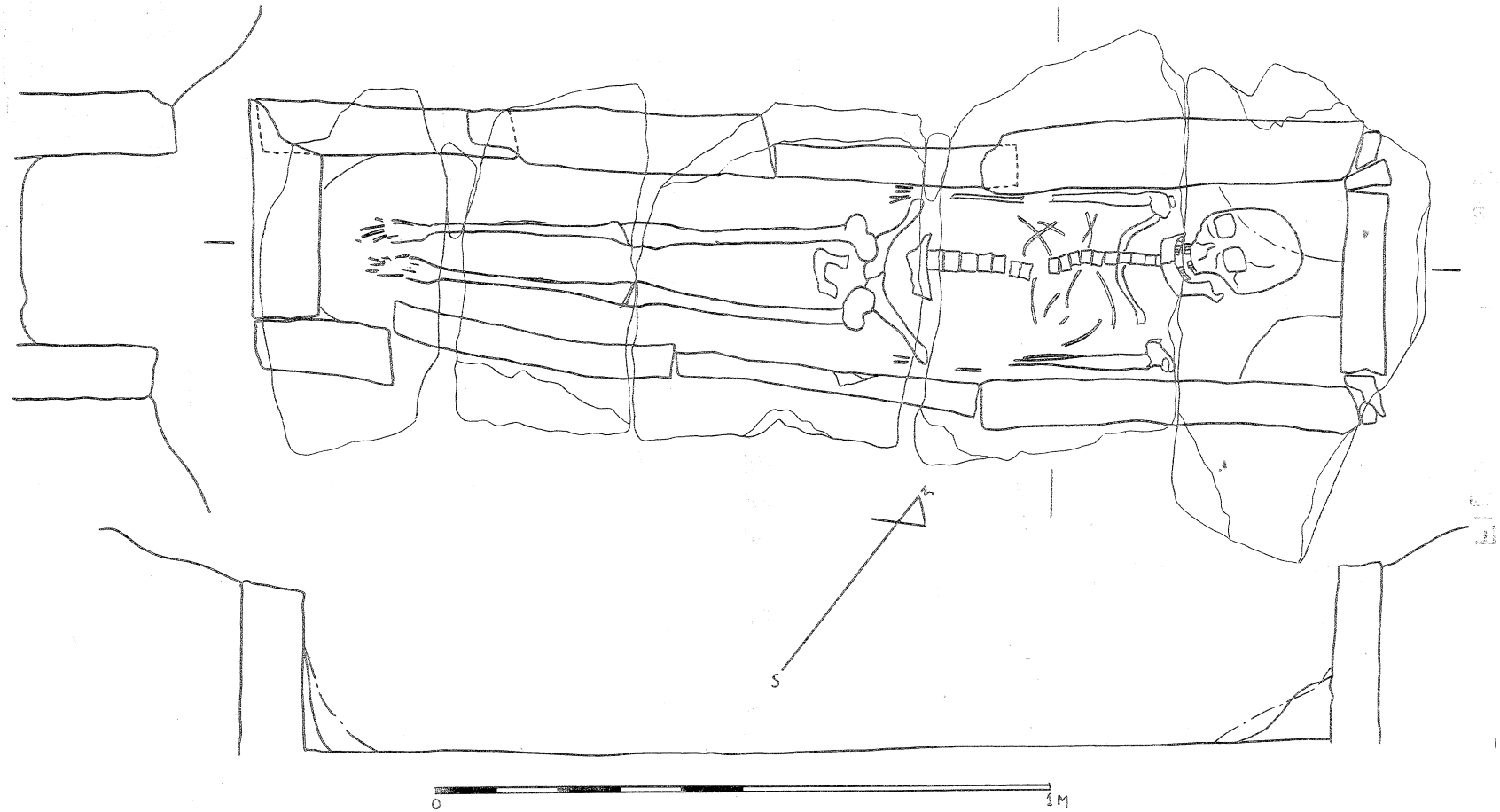


Fig 7　4号墓実測図



天山・桜谷遺跡発掘報告書
（松山市文化財報告書II）

昭和48年３月30日　印刷

昭和48年３月31日　発行

編　集　松山市教育委員会社会教育課
発　行　松山市教育委員会
印　刷　明星印刷株式会社